―― 府営地域総合オアシス整備事業（泉南地区・双子池改修工事）に伴う ――

男里遺跡発掘調査概要・Ⅳ

―― 泉南市男里所在 ――

男里遺跡全景（1984年撮影）

1999.3

大阪府教育委員会

はしがき

泉南市男里に所在する男里遺跡は南北約1,300m、東西約900mをはかる大規模な集落遺跡で、縄文・弥生時代から中世に至る時代の遺構遺物が発見されています。

男里遺跡ではこれまで、本府教育委員会や泉南市教育委員会等により約50ヶ所で土木工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査が実施されてきました。その結果、多くの考古学的知見が得られています。なかでも府道建設に伴う調査や府営地域総合オアシス事業（泉南地区・双子池改修工事）に伴う調査で数多くの知見が得られています。

また、これらの成果と共に、縄文時代以前に和泉山脈から海に向かう旧河道と、浜堤により流れが遮られ滞留した痕跡が確認されつつあり、集落展開の復元とともに古環境が現代に蘇ってきています。

これまで積み上げられた男里遺跡の調査成果の一つ一つは泉南地域の具体的な歴史過程を復元する上で貴重な歴史資料であり、過去の日本の歴史の一断面を雄弁に物語るデータであります。

こうした事実を深くご理解いただいて地域の先人たちの文化遺産を保護顕彰することに思いを致して頂きたいと思います。

最後になりましたが今後とも本府の文化財保護行政に対し、一層のご協力、ご理解を賜りますようお願い申し上げます。

平成11年３月

大阪府教育委員会

文化財保護課長　鹿野　一美

例　　言

1．本書は、大阪府教育委員会文化財保護課が、大阪府農林水産部から依頼を受けて、平成10年度に実施した泉南市男里所在男里遺跡の府営地域総合オアシス整備事業（泉南地区・双子池改修工事）に伴う第４次発掘調査事業の概要報告書である。

2．調査は、大阪府教育委員会文化財保護課主査芝野圭之助を担当者として実施し、泉南市教育委員会社会教育課城野博文の協力を得、平成10年11月に着手し、平成11年３月に終了した。

3．調査の実施にあたっては、大阪府泉州農と緑の総合事務所、泉南市、泉南市教育委員会、(財)大阪府文化財調査研究センターの他、地元関係者の方々から多大な援助を受けた。記して感謝の意を表したい。

4．本書の執筆および編集は芝野圭之助、城野博文があたった。

5．本調査にあたっては写真・実測図等の記録を作成するとともに、カラースライドを作成した。広く利用されることを希望する。

凡　　例

1．遺構配置図の縮尺は１/250とし、遺構実測図の縮尺は１/20ないし１/100としている。

2．発掘調査及び、本書記載の基準高はＴ．Ｐ．(東京湾平均海水位)＋を使用しているが、本文、遺構実測図ともにＴ．Ｐ．＋は省略している。

3．遺構配置図及び遺構平面図には国土座標Ⅵ系に基づく、Ｘ・Ｙ座標を表記しており、図面の方位は座標北を示す。

4．土層の断面は、平面図中に指示線とアルファベットによって示され、その場所が一致する。

5．図示している遺物の縮尺は１/４とした。また遺物実測図と写真図版の遺物番号は統一している。

6．第15図の作製にあたっては(財)大阪府文化財調査研究センター松岡良憲、田中龍男の両氏より資料の提供を受け、またＰＬ.２の作製および表紙写真については泉南市教育委員会より資料の提供を受けた。

7．また付章Ⅰとして奈良教育大学教授三辻利一先生より泉南地域出土遺物に関する胎土分析結果の玉稿を賜った。なお胎土分析に供した各遺跡出土の資料は下記の諸氏の協力によるものである。記して感謝の意を表したい。(順不同、敬称略)

前川浩一(貝塚市教育委員会)、鈴木陽一、中岡　勝(泉佐野市教育委員会)、三好義三、田中早苗(阪南市教育委員会)、小川正純(岬町教育委員会)

本　文　目　次

第１章　調査に至る経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２章　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第３章　男里遺跡をとりまく環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　第１節　地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第４章　調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
　第１節　基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
　第２節　遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
　第３節　遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
第５章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
　第１節　男里遺跡の歴史的景観の復元・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
　第２節　泉州南部における弥生時代中期の遺跡について・・・・・・・・・・・・・・・・27
付章
　　Ⅰ　泉州南部の遺跡出土土器の蛍光Ｘ線分析　　奈良教育大学三辻利一・・・・・・・・31
　　Ⅱ　男里遺跡他出土土器の胎土分析　　パリノ・サーヴェイ株式会社・・・・・・・・・38
報告書抄録・・43

挿　図　目　次

第１図　泉南市及び男里遺跡の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２図　調査区位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第３図　調査区の地区割り・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第４図　双子下池における既往の調査成果概念図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第５図　調査区断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第６図　調査区平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第７図　流路１平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
第８図　流路２遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
第９図　流路２および流路３断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
第10図　流路３遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
第11図　流路１出土の土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
第12図　流路２出土の土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22

第13図　流路３出土の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
第14図　泉南市域の地形図（樽井町役場「樽井都市計画区域全図」昭和28年を改変）・・・25
第15図　調査区周辺の遺構概略図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
第16図　泉州南部における主要な弥生時代中期の遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
第17図　胎土分析結果両分布図　①～④・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
第18図　胎土分析結果両分布図　⑤～⑧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
第19図　Ｋ－Ca分布図およびRb－Sr分布図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41

表　目　次

第１表　泉州南部地域における弥生～古墳時代の遺跡の動向・・・・・・・・・・・・・・・29
第２表　分析データ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
第３表　蛍光Ｘ線分析結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
第４表　文化財一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42

図　版　目　次

ＰＬ．１　泉南地域の遺跡分布図
ＰＬ．２　泉南地域の地形分類図
ＰＬ．３　調査区遠景
ＰＬ．４　調査区全景①
ＰＬ．５　調査区全景②
ＰＬ．６　遺構①
ＰＬ．７　遺構②
ＰＬ．８　遺構③
ＰＬ．９　出土遺物①
ＰＬ．10　出土遺物②
ＰＬ．11　出土遺物③

第１章　調査にいたる経過（第１・２図）

泉南市は大阪府の西端部に位置しており、地形的には北西には大阪湾が開け、南からは和泉山脈が迫り、和泉山脈と大阪湾に挟まれた些少な平野部が人々の主たる活動の場となってきた。また平野部には和泉山脈から派生した多くの丘陵を縫って大阪湾に流れ込む大小の河川が認められる。このうち市域の東端を流れる樫井川を介して泉佐野市や田尻町と接し、西端を流れる男里川を介しては阪南市と接している。また根来街道を通じ和泉山脈を越えると、和歌山県岩出町に達する。

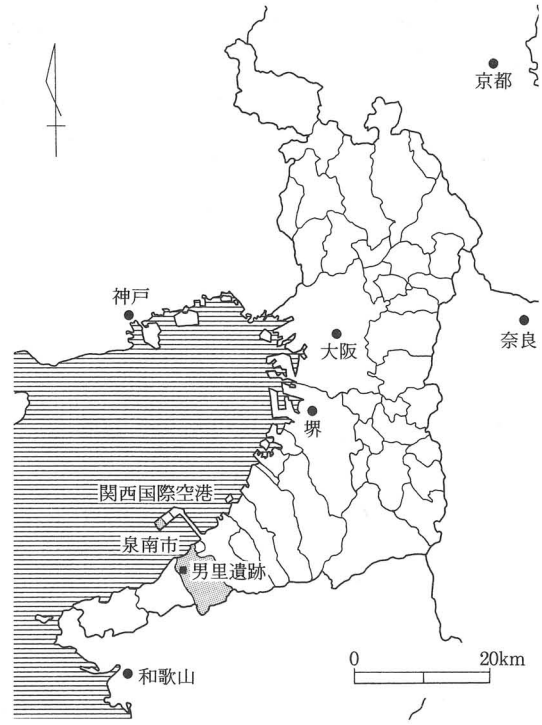
このような地形的特徴のもと、市域においては、主に溜め池を中心とする水路網に農業用水の確保を求めてきた。そのため市域には非常に多くの溜め池が構築されることとなる。それらの多くは谷地形を築堤によって堰き止め構築されており、本格的な耕地開発が開始される平安時代～中世以降に莫大な労働力を投下して構築されてきたものと考えられる。しかしこれらの溜め池は、幾たびの修復を経ているとはいえ、築造以来歴年の溜水による堤体浸食などが進み、漏水や取水施設の老朽化などが顕著になり、また防災上も、これらの早急な改善が求められることとなった。

以上のことに鑑み大阪府農林部においては府営地域総合オアシス事業を計画し、安全性の確保や効率的な用水の確保などに努めることとなった。ここに報告する双子池における改修事業もこのような観点より実施されるものである。

双子池は男里地区の農業用水をまかなう主たる溜め池であり、「信長街道」に比定される道を挟んで南北に長く伸びるその姿は、地域に独特の景観を作り上げている。その規模は双子上池が南北約130m、東西約200mを測り、北側の双子下池が南北約170m、東西約150mを測るものである。第３章においても後述するが、双子池は地形分類上において男里川旧河道の痕跡とされ、過去の発掘調査においても度々遺跡のメルクマールともいうべき多くの成果が得られているのである。

大阪府教育委員会ではこのような状況の下、平成８年度より双子下池において発掘調査を実施し、本書では、今年度実施された第４次調査の成果について報告するものである。

今年度の調査区は、大阪府泉州耕地事務所が「地域総合オアシス整備事業」の一環として、双子池の堤体改修工事をおこなった95年度調査区（下池南西

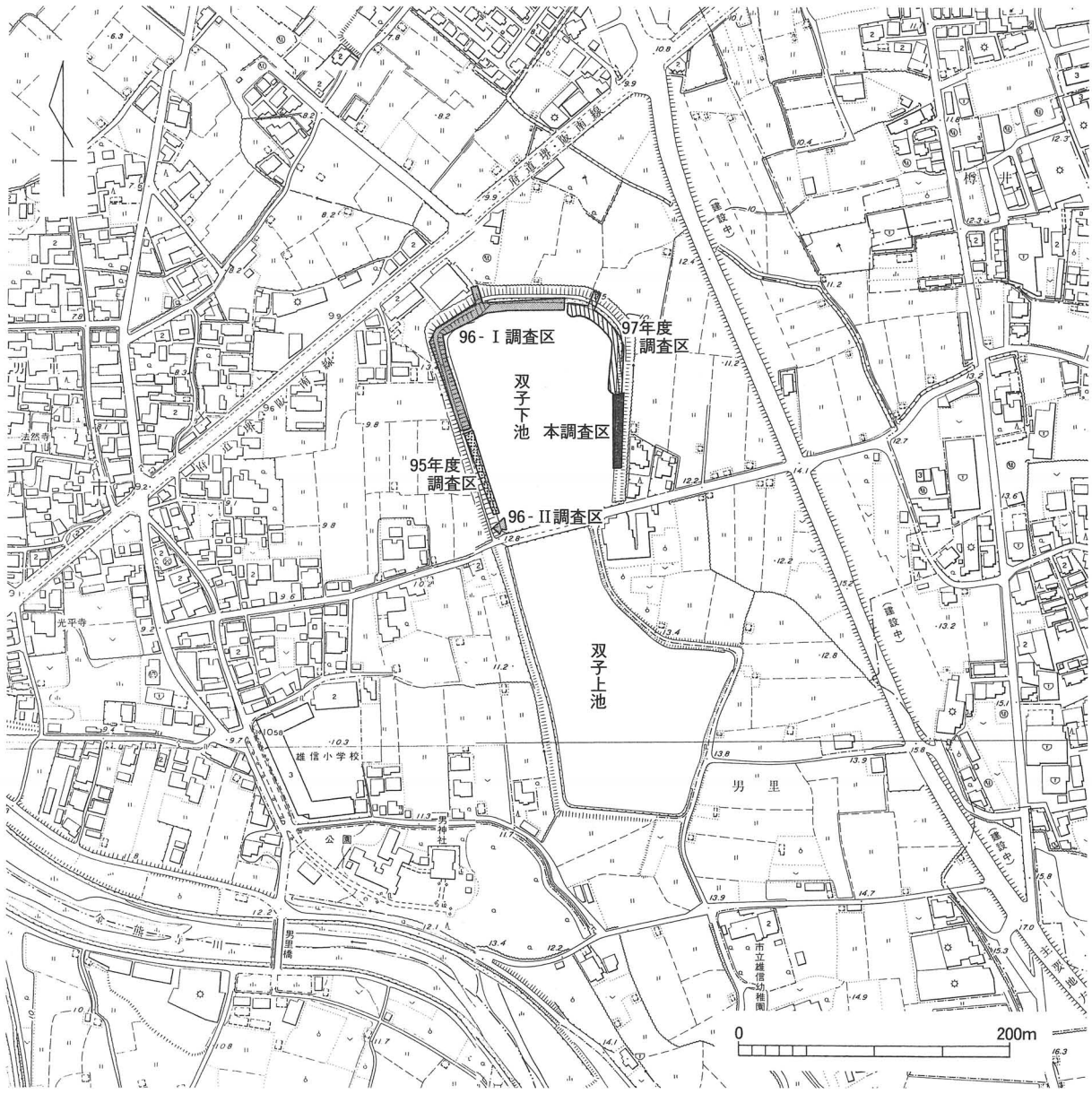


第１図　泉南市及び男里遺跡の位置

部、幅約７ｍ、長さ約78ｍ、面積約550㎡）、96年度調査区（下池北西部、Ⅰ区幅約６～７ｍ、総延長約170ｍ、面積約1,000㎡）、97年度調査区（下池北東部、幅約６ｍ、総延長約100ｍ、面積約600㎡）に連続する（下池南西部、幅約5.5ｍ、長さ約55ｍ、面積約300㎡）を調査の対象とした。

調査は文化財保護課調査第１係主査芝野圭之助が担当し、泉南市教育委員会社会教育課文化財保護係城野博文氏に現地調査の協力を得た。

なお、調査の実施及び本書の作成にあたっては、伊藤由紀、江尻美代子、奥田　桂、小野祐子、片木直幸、加茂大志、蒲生徹幸、久我実希恵、熊田敬子、蔵田弘幸、島津真理、富　愛、中谷めぐみ、福井元気、藤野　渉、真鍋紀美子、向林智与の援助を得た。また、石橋広和、大野路彦、岡　一彦、岡田直樹、堅田　直、仮屋喜一郎、河田泰之、田中龍男、西澤順也、堀田啓一、松岡良憲、山岡邦章の諸氏には有益なご教示、ご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。



第２図　調査区位置図

第２章　調査の方法（第３図）

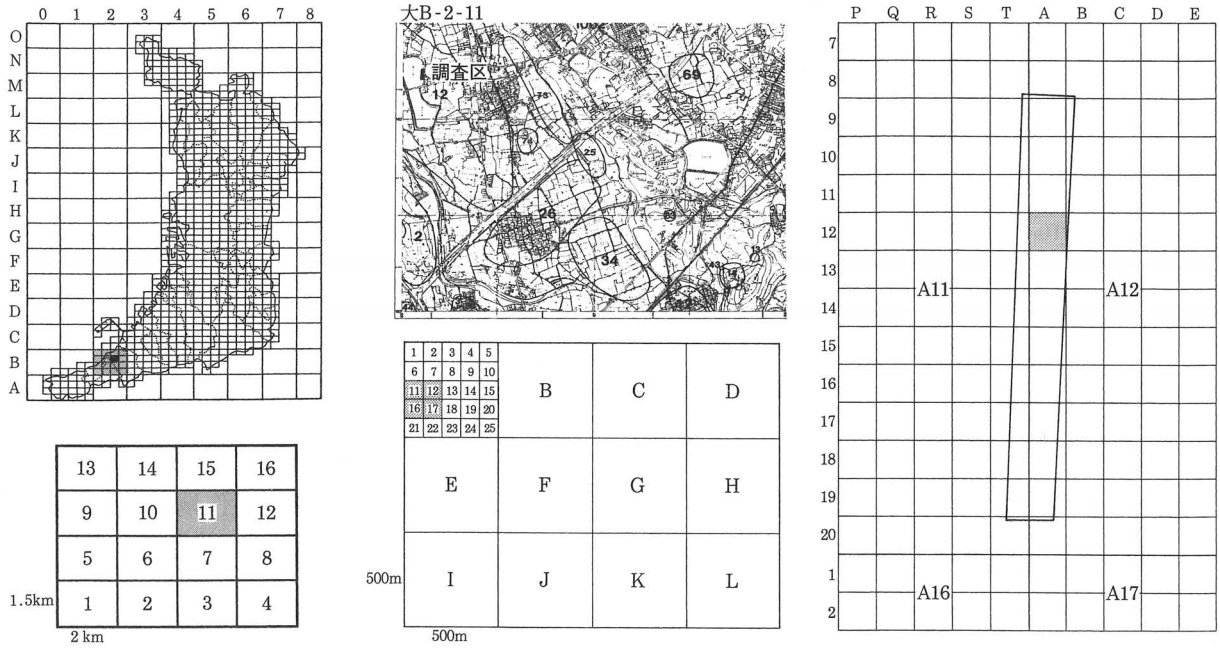
調査は、95年度に実施した試掘調査の成果および北側に隣接する97年度調査の成果をもとに、バックホウにより提体の盛土、池底のヘドロを除去し、以下を人力掘削による発掘調査の対象とした。人力掘削による調査対象としたのは調査区の東側において、標高約10.8m以下についてである。

調査区の形状はほぼ南北方向に軸をそろえた長辺約55m、短辺約５mの長方形をなすものである。

調査にあたっては調査精度を高めるため、調査区の地区割りをおこなっている。また当調査は、95年度からの継続事業であるため、過去３カ年にわたりおこなわれた調査の地区割りと対応する国土座標Ⅵ系にもとづく５mの方形区画を使用した。すなわちこの方形区画の設定は、大阪府都市計画図（１/2500）の地形図をもとに、地形図を12等分した500mの方形区画（大区画）をつくり、ＡからＬ間での記号を付す。この一区画をさらに25等分し、100mの方形区画（中区画）をつくり、01から25までの番号を付す。この100m区画を400等分したものが５×５mの最小単位の方形区画（小区画）となり、Ｘ軸はＡ～Ｔ、Ｙ軸は１～20で示される。今年度調査区についてはA11－９TからA12－20Aにあたり、それぞれを座標値で示せば、A12ラインはＹ＝－67.900となり、また－13AラインはＸ＝－181.760の値となる。

このようにして設定した区画は、調査時における遺構実測や遺物出土状況の実測、また包含層掘削の際には、遺物の取り上げの基準となるものである。これらの場合、各地区名は北西隅の杭番号によって代表させることとした。例えば、網掛け部で出土した遺物の地区番号はA12－12Aとなる。なお、東西軸については、１A～１Tの次は２A～２Tとなる。

また、調査の迅速化、省力化をはかるため、航空写真測量による図化作業を実施し、調査区全域について１/20の平面図を作製した。



第３図　調査区の地区割り

第3章　男里遺跡をとりまく環境

第1節　地理的環境（ＰＬ.２）

男里遺跡は大阪府の南西端に位置する泉南市の市域北西端部に位置している。市域は東の樫井川と西の男里川の二河川によって境界をなし、それぞれ泉佐野市や田尻町、阪南市と接している。また北には大阪湾が大きく開け、近年開港した関西国際空港を臨むことができる。南には基盤山地である和泉山脈が連なっている。和泉山脈を越えると和歌山県那賀郡へと至る。

今日までの周辺の調査成果を概観すると、先に述べた樫井川と男里川にはそれぞれの水系毎に緩やかな境界が求められ、水系毎の小社会が営まれていたと考えられる。それらは現行の遺跡分布図においても容易に看取でき、本書で取り上げる弥生時代や古墳時代において、その傾向は特に顕著である。

地形的に市域を概観すると、基盤山地から北方に向けて扇状に拡がる丘陵および高位段丘に挟まれるように低位段丘がよく発達している。両者の境界部には中位段丘が帯状に拡がっており、低位段丘との間に比高差約10m程の段丘崖を形成している。丘陵や高位段丘は近年、ゴルフ場や住宅地としての開発が盛んに行われ、地形の変形が著しい。また低位段丘部については、市域では最も広大な面積を占めることから開発が進み、市街化の進んだ市域の中心部を載せる。

これらの洪積段丘を挟むように、先の２つの河川がほぼ平行に伸び、大阪湾へと流入している。これらの河川に伴って形成された氾濫原及び谷底低地、自然堤防、また旧河道などの地形が現河道に沿うように分布している。さらに周囲には河川の沖積作用によって形成された沖積段丘が発達しており、安定した生活の場として利用されてきた。

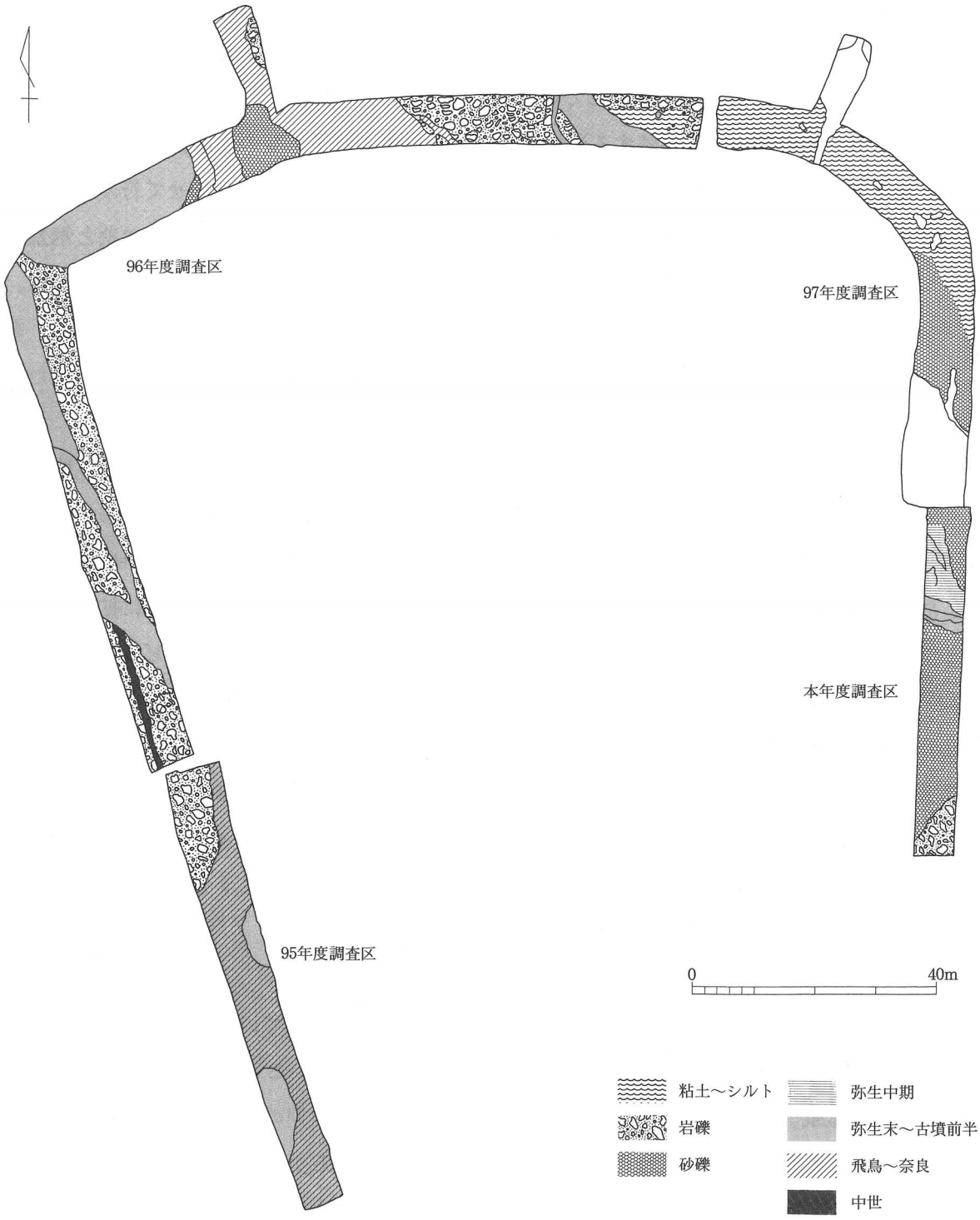
男里遺跡は男里川右岸に立地する市域最大の面積を誇る遺跡である。その立地を地形分類的に概観すると、男里川右岸に発達した沖積段丘面のほか、男里川及び旧河道によって形成された自然堤防や氾濫原、また旧河道そのものなどが含まれており、遺跡の面積に比例するように地形的にも多岐にわたる内容をみせる。遺跡の南端と北端についてその標高を比較すると、南端では約14.0m～16.0m、北端においては約5.0m～8.0mを測り、その比高差は約６～11mある。

これらのうち旧河道については今回の調査対象となった双子池がその痕跡であるとされ、双子池を挟んで南北に伸びるものと考えられている。これら旧河道の右岸に拡がる沖積段丘面は早くより集落などとして開発が進み、現在確認されている弥生時代や古代の集落範囲を含むものである。また現在も男里集落が男里川によって形成された自然堤防上に立地し、中世に始まる「集村」の景観を今も残しているとされる。あわせて周辺の沖積段丘面や氾濫原上には耕作地が大きく拡がり、遺跡中央に位置する双子池と共に地域の景観を形づくっているのである。

しかし近年は、遺跡を縦貫するように大規模な府道が敷設されたのをはじめ、遺跡の北東部を中心に宅地などの開発が盛んに行われ、こうした遺跡の景観も失われつつある。

第２節　歴史的環境（ＰＬ.１、第２・４図）

男里遺跡は泉南地域においては、調査の最も進んでいる遺跡のひとつとして数えられ、今日までに数多くの調査が実施されてきた。現在のところ縄文時代晩期から近・現代にいたる複合遺跡として周知されるに至っている。ここではこれらの調査成果に基づいて、以下に男里遺跡および周辺の歴史的内容を概観していくこととする。



第４図　双子下池における既往の調査成果概念図

今回の調査は継続して行われる発掘調査の4年度目にあたることから、まずはじめに95年度～97年度にわたって行われた調査の概要をみておきたい。95年度は双子下池の最も南西部からの調査となった[①]。調査面積は約550㎡である。調査では弥生時代後期～古墳時代前期と、飛鳥～奈良時代の2時期の自然流路が確認された。流路埋土より出土した多量の土器や木製品などは、自然流路からの出土ではあることを差し引いても、質量共に良好な一括資料としての評価が与えられるものであり、当該期の泉南地方の土器様相の一端を示すものとして注目される。また同調査時に双子下池内においてナイフ形石器が採集されている。詳細は不明であるものの、遺跡の年代を一気に遡らせ得る遺物として注目される。またこの年には今後の発掘調査に備え、データ収集のために堤体にそって試掘調査を実施している。

96年度は前年度の調査区に接続する形で、馬蹄形を呈する双子下池の先端部分、北西端部の調査が実施された[②]。また、一昨年度調査区に南接する下池南西端部の調査も併せて行っている。調査面積は約1050㎡である。調査では一昨年に引き続き、弥生時代後期～古墳時代前期と飛鳥～奈良時代の大きく2時期に分けることのできる溝やピット群、自然流路などが確認されている。なかでも注目されるのは7世紀中葉から8世紀にかけて構築されたと考えられる「しがらみ」を伴う自然流路が確認されたことである。この結果周辺に生産域が想定されることとなり、また集団によって灌漑管理を行っていたことを示唆するものである。

97年度には、堤体北東端部から南東部にかけての調査が行われた[③]。調査区は双子下池の北東コーナーに沿って設けられ、逆L字形を呈するものである。調査面積は約600㎡であった。調査では良好な遺構や遺物の検出には恵まれなかったが、調査区の北西部から中央部にかけて比較的安定した地山が確認されたことは大きな成果であった。この地山はさらに北東方向に拡がるものと考えられ、96年度調査の北東端部において確認された弥生～古墳時代に属するピットなどがさらに拡がるものと考えられる。また調査区の南端部においては、帰属時期は明らかにされなかったが、大規模な自然流路も確認されており、複雑に切り合う旧河道の一端が明らかにされた。

以上のように、過去3カ年の調査においては主に溝や自然流路などが確認されており、直接集落などに結びつく成果はほとんど得られていない。しかしわずかに確認されたピットや、それぞれの調査で出土した大量の遺物などは周辺に集落の存在を期待させるに十分なものである。ではさらに周辺の調査成果に目を向けてみよう。

縄文時代～弥生時代

現在のところ、縄文時代晩期の遺構や遺物は遺跡の北方に集中している。最近の調査ではそれまで知られていなかった突帯紋土器が比較的まとまって出土している[④]。かつそれらには在地産と他地域産による双方の土器が同時に含まれていることから、当該期の活発な交流活動を伺える資料となった。またさらに北方の地点では滋賀里Ⅲ～Ⅳ式に属する土器群も確認されており[⑤]、周辺に集落の存在が想定される。しかしそれら縄文の系譜は一旦空白期を迎え、続く弥生時代前期の遺構や遺物は、現在のところまとまった分布をみせない。周辺では岡中西遺跡[⑥]や滑瀬遺跡[⑦]にお

いて石匙や有舌尖頭器が出土しており、同時代の遺跡の分布が拡がる可能性がある。

こういった状況は樫井川流域の遺跡群においても同様であり、縄文時代の状況は余り判然としないのが現状である。しかしこうしたなかで弥生前期に突如として成立する氏の松遺跡が注目される[8]。氏の松遺跡は樫井川の左岸、低位段丘のまさに縁辺部に展開する遺跡である。近年の調査によって掘立柱建物のみで構成される集落と、瀬戸内地域の影響を強く受けた土器群が確認されている。このうち掘立柱建物には独立棟持ち柱を伴うものがある。しかし現状では、集落の構造や消長等、不明な点も多くあり、今後の調査研究を待たねばならないが、地域の歴史を考える上で特筆される遺跡であることは間違いない。

弥生時代中期になると男里遺跡では、遺跡南半部の段丘面上に集落が営まれる。現在までに十数棟の竪穴住居や複数の掘立柱建物などが確認され[9]、近接して木棺墓も確認されている[10]。しかしその集落の存続時期も長くは続かず、おおむね中期後半の短期間におさまるようである。

この弥生中期の集落の系譜を汲む可能性のあるものとして、男里遺跡から南東方向へ約2.5km離れた「なめくじ山」と呼ばれる独立丘陵を中心に展開し、高地性集落と捉えられる滑瀬遺跡がある[11]。滑瀬遺跡では20数棟の竪穴住居や掘立柱建物などが確認されている。出土遺物よりおおむね畿内Ⅳ～Ⅴ様式初頭までの存続期間であったと考えられている。また男里遺跡の南西約２kmの「経塚山」山腹より畿内Ⅳ様式に位置づけられる四区袈裟襷紋銅鐸が出土しており[12]、府下最南端の銅鐸出土例となり注目される。今後はこういった小中規模の集落に銅鐸が伴いうる社会背景が復元されなければならないだろう。

樫井川流域に目を移せば、縄文時代から連綿と続く複合遺跡とされる三軒屋遺跡を中心に新家遺跡[13]や向井山遺跡[14]、新家オドリ山遺跡[15]などが確認されている。このうち向井山遺跡では弥生時代中期に属する方形周溝墓が確認されており、新家オドリ山遺跡においては詳細は不明ながらも、十数棟の竪穴住居などが確認され高地性集落のひとつとして数えられている。

弥生時代～古墳時代

弥生時代後期から古墳時代前期にかけては先述したように、遺跡の中央部の双子池周辺、すなわち旧河道周辺に集落が営まれている可能性が非常に高い。先の双子池の調査では多くの製塩土器が出土していることから、当該期に製塩活動が活発化したものと考えられる。また降って古墳時代後期になると、明確な集落範囲等は不明であるが、再び遺跡の北方へ活動の中心が移動するようであり、当該期の溝[16]や小石室[17]などが確認されている。

また周辺では男里遺跡から南へ約１kmの丘陵上に高田山古墳群が築かれている[18]。現存するものは１基もなく詳細は不明であるが、５基の円墳より構成された小規模な古墳群であったとされる。男里川流域の唯一の古墳群として注目されるものである。

かえって樫井川周辺には市域最古の古墳を含むフキアゲ山古墳群、新家古墳群などいくつかのまとまりをもって古墳が築造されている[19]。この点において両河川の形成する水系小社会に異なる点が指摘されるのであるが、両流域共に小規模な古墳や古墳群のみしか築造しえなかった社会背

景が看取されるのである。

古代

飛鳥～奈良時代にかけては、双子池の周辺で掘立柱建物などが確認されており[20]、先にみた「しがらみ」などを管理・経営することのできた集団の存在が想定される。近年の調査では双子池の東方において、竪穴住居や掘立柱建物、また廃棄土坑などが確認されている[21]。これにより旧河道の両岸に集落が営まれていたことが明らかとなった。廃棄土坑からは多くの土器が出土し、なかでも大量の製塩土器が含まれていたことが特筆される。なお古代律令政下においては、市域は畿内の南西端、和泉国（757年～）日根郡呼唹郷に比定され、遡って7世紀後半には市域を横断するように官道である南海道が制定される。同じく7世紀後半には、南海道に面して樫井川流域の独立丘陵上に府下最南端の古代寺院である海会寺が建立されている。また現男里周辺には呼唹駅が想定されており、今後調査が進展すれば、呼唹駅の運営に当たった集落や、駅などの官舎の実態が明らかになる可能性がある。

同時代の遺跡を市域に求めれば、樫井川左岸の段丘面上に位置する岡田東遺跡において、6世紀末～7世紀初頭の竪穴住居や掘立柱建物が確認され、またわずかに遅れて非常に大規模な掘立柱建物が建てられている[22]。この掘立柱建物は北西から南東方向に主軸を持つものであり、南方向には庇を伴う。部分的な確認ではあったが、桁行5間、梁間4間、面積約103㎡に復元することができ、海会寺の東側に隣接する集落にⅠ～ⅩⅠ期にわたって展開される建物群の中で最大規模のSB210と同程度の規模を持つものとなる[23]。またこの建物が海会寺東側の集落に居住が始まる7世紀初頭に前後して建てられていることも注目されるものである。このように両者の間には密接な関係が想定され、今後は岡田東遺跡で得られたデータを、より積極的に評価し、海会寺建立を巡る地域の歴史の中に位置づけていかなければならないだろう。

平安時代になると男里遺跡では、若干の活動範囲の拡大が伺え、双子下池の北東方向の地点で複数の掘立柱建物や廃棄土坑が確認されている[24]。このうち廃棄土坑からは多数の黒色土器などが一括出土しており、隣接する掘立柱建物が被災し、一括投棄されたものと考えられている。またこれらの集落から北へ約500mの戎畑遺跡においては、平安時代後半に廃絶したと考えられる大規模な灌漑用水路が確認されており[25]、両者の関係が注目される。また平安時代末期になると遺跡の西部に光平寺が建立される。現在のところ光平寺創建に遡りうる資料は限られており、その実態についても不明な点が多いが、周辺の調査においては中世まで降るものながら、瓦窯に関係する可能性が考えられる焼土の詰まった土坑などが確認されている[26]。

市域では樫井川左岸の低位段丘東縁部に立地する北野遺跡において比較的大規模な掘立柱建物が確認されている[27]。当遺跡は後の熊野街道から少しはずれた地点に位置しており、街道によって育まれた遺跡であるとの考え方もできる。

中世～近世

中世になると、遺構や遺物の分布が遺跡全域に拡がり、明確な活動範囲の拡大が明らかとな

る。灌漑技術などの進歩により、大規模な耕地開発が可能となり、より効率的な耕地経営を実践するために、集落域と生産域が明確に区別されるようになる。この結果「集村」と呼ばれるように居住域が限定され、男里川右岸の自然堤防上に連綿と集落が立地することになる。また周辺では真蛸壺や土錘など、漁撈具の出土が顕著であり、地域では耕作と併せて漁撈にかける比重が高かったことが知られる。先の戎畑遺跡の調査においては真蛸壺の焼成土坑がまとまって確認されており、また近年は周辺の遺跡においても同様な遺構の確認例[28]が増加していることから考えても、当時周辺においては普遍的に真蛸壺などの生産が集落内で行われていたことを示しているものと考えることができ、中世期の生産活動を知るうえで、非常に貴重な資料が得られている。

中世以降、土地利用の範囲そのものには大きな変化は窺えない。集落域、生産域ともに基本的に前代を踏襲し、現在に至っているようである。しかし近世末期に位置づけられる製糖に伴う遺物が、当遺跡のみならず、周辺の幡代遺跡や光平寺跡などから比較的まとまって確認されていることが注目される[29]。当時、製糖がある種地域の特産品であった可能性も考えられ、生産活動の実態を物語るものとして非常に興味深いものである。今後は遺物の具体な使用方法を確定すると共に、文献資料などからのアプローチが必須となろう。

註 ① 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅰ』(1997)
② 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅱ』(1997)
③ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅲ』(1998)
④ 泉南市教育委員会「男里遺跡95-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅩⅢ』(1996)
⑤ 泉南市教育委員会「男里遺跡・Ⅱ」『泉南市文化財年報№1』(1995)
⑥ (財)大阪府埋蔵文化財協会『岡中西遺跡』(1988)
⑦ (財)大阪府埋蔵文化財協会『滑瀬遺跡』(1985)
⑧ 泉南市教育委員会『岡田西・氏の松遺跡発掘調査報告書』(1995)
⑨ 1993～1995年度(財)大阪府埋蔵文化財協会および(財)大阪府文化財調査研究センターによる発掘調査
⑩ 泉南市市史編纂委員会「第1章 原始の泉南」『泉南市史－通史編』(1987)
⑪ ⑦と同じ
⑫ ⑩と同じ
⑬ 泉南市教育委員会「新家遺跡」『泉南市文化財年報№1』(1995)
⑭ 泉南市教育委員会『向井山遺跡発掘調査報告書』(1972)
⑮ ⑩と同じ
⑯ 泉南市教育委員会「男里遺跡92－1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅹ』(1993)
⑰ ⑩と同じ
⑱ ⑩と同じ
⑲ ⑩と同じ
⑳ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』(1978)
㉑ 泉南市教育委員会「男里遺跡96-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅩⅣ』(1997)
㉒ 泉南市教育委員会「岡田東96－1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅹ』(1993)
㉓ 泉南市教育委員会『海会寺－海会寺遺跡発掘調査報告書－』(1987)
㉔ (財)大阪府埋蔵文化財協会『男里遺跡』(1993)
㉕ 泉南市教育委員会『戎畑遺跡発掘調査現地説明会資料』(1996)
泉南市教育委員会「戎畑遺跡97－2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅩⅤ』(1998)
㉖ 泉南市教育委員会「光平寺跡93－2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅩⅡ』
㉗ 泉南市教育委員会「北野遺跡」『泉南市文化財年報№1』(1995)
㉘ 泉南市教育委員会「樽井南遺跡96－1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅩⅣ』(1997)
㉙ 泉南市教育委員会「幡代遺跡」『泉南市文化財年報№1』(1995)
泉南市教育委員会「男里遺跡97－2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅩⅤ』(1998)

第４章　調査の成果

第１節　基本層序（第５図）

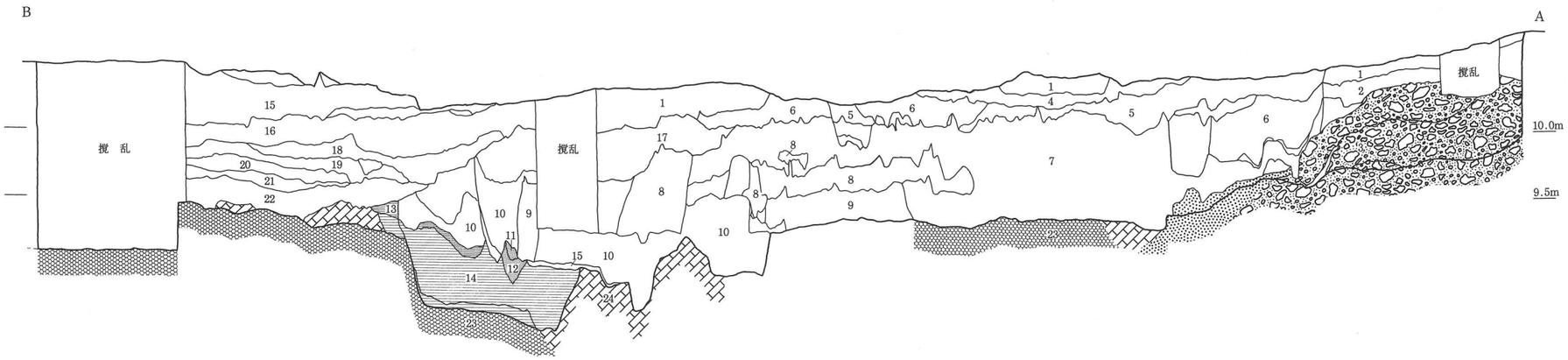
今年度の調査対象地は双子下池の南東側にあたり、現在の堤体軸に平行に調査区が設けられた。第２章でも述べたように、調査に先立って重機による現堤体の掘削が行われ、人力掘削による調査対象としたのは標高10.8m以下についてである。よってここでとりあげる基本層序の観察についても、基本的にそれ以下の層序について述べるものである。

調査区の基本層序は、調査区の大半が現在の堤体直下に位置することから、調査区の東端から中央にかけては、ほとんどが堤体構築に伴う盛土となっている。堤体盛土は暗黄褐色混じり暗灰褐色粘質土や灰黄褐色土などからなる。これらは調査区の北端では層厚約10～30cmを測り、それぞれが水平な帯状の堆積として観察される。堤体盛土より出土遺物がなかったため、築堤時期は明らかではないが、それぞれ分層される帯状の土層の単位が築造の工程単位を示すものとも考えられる。一方、調査区の中央部より南側については、盛土の層厚が約10～60cmと幅があり、その堆積についても規則的な積み上げは認められない。先述したように現在の堤体が頂部より半裁されたが、その断面観察によるとやはり調査区の中央から南端では盛土の様子が全く異なっており、堤体全体に改築が行われたものと考えることができる。ここでも堤体盛土からの出土遺物がなく、その築造や改修時期は不明である。

これらの堤体盛土はほとんどが遺構面である暗灰褐色砂礫や暗黄褐色粘質土の直上より積み上げられているが、調査区の東端、中央部付近では暗青灰色粘土が遺構面を掘り込んで積まれており、堤体構築に伴う鋼土と捉えられる。これら堤体盛土のうち、調査区中央部から北端にかけて認められる灰黄褐色土などには暗褐色シルトのブロックが多量に含まれており、また調査区中央部では地山層である暗黄褐色粘質土が巨大なブロック状に積み上げられている部分も認められる。暗褐色シルトについては、96年度調査によって確認されている包含層と捉えられ、堤体構築に際して周辺の包含層や地山面そのものが削平され、堤体土に利用されている可能性が高い。

堤体盛土直下の標高は調査区の南部に河岸礫が厚く堆積しているため、南側に向かってレベルを上げており、北端部においては約9.4mを測るが、南端部では約10.7mを測る。またこの河岸礫は昨年度の調査で確認された流路に対応するものである可能性が高く、河岸礫を南肩として調査区全体が弥生中期以前の河道に含まれるものと考えられる。

調査区の中央から西端にかけての状況は全く異なり、橙色混じり暗青灰色粘土や青灰色混じり暗灰褐色粘質土など、池底に堆積したヘドロや泥土が約10～20cmほどの厚さで水平に堆積している。これらを除去するとさらに橙色混じり黄灰褐色粘土や暗灰オリーブ褐色砂礫土が約10cm～20cmの厚さでほぼ水平に堆積しており、以下に灰褐色砂礫や淡黄褐色粘質土、暗黄褐色粘質土により形成される遺構面が拡がる。

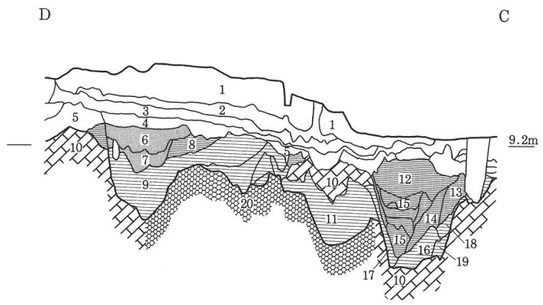


東壁断面図

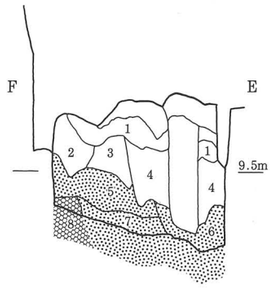
1 灰褐色混じり明橙色土
2 灰褐色粗砂混じり淡褐色土（旧表土）
3 灰褐色砂礫（下部人頭大の礫多く含む）
4 黄褐色混じり灰褐色砂
5 灰褐色礫混粗砂（円礫多く含む）
6 暗橙色混じり暗灰褐色粘質土
7 暗黄褐色混じり暗灰褐色粘質土（マンガン粒多く含む）
8 灰褐色混じり暗黄褐色粘質土（擬似地山の積みあげ土）
9 暗褐色シルト
10 暗青灰色粘土（ハガネ土）
11 暗灰オリーブ色シルト
12 灰オリーブ色砂質土
13 淡褐色砂質土
14 暗灰褐色礫混じり土
15 灰褐色混じり暗黄褐色粘土（暗褐色ブロック含む）
16 灰黄褐色土（暗褐色ブロック多量に含む）
17 暗灰褐色混じり暗黄褐色粘質土（マンガン粒多く含む）
18 黄灰褐色粘土（暗褐色ブロック含む）
19 青灰色混じり灰黄褐色粘土
20 淡暗褐色粘質土（暗褐色ブロック含む）
21 明オリーブ色粘土
22 淡黄褐色粘質土（暗褐色ブロック含む）
23 暗黄褐色粘質土（疑似地山）
24 暗灰褐色砂礫

西壁断面図

1 池底堆積土
2 橙色混じり暗青灰色粘土
3 青灰色混じり暗灰褐色砂質土
4 橙色混じり黄灰褐色粘土
5 暗灰オリーブ褐色礫混じり土
6 灰褐色混じり暗黄褐色粘質土
7 暗褐色礫混じり土
8 暗灰オリーブ褐色礫混じり砂質土
9 暗灰褐色礫混じり土
10 暗オリーブ混じり暗黄褐色粘質土（擬似地山）
11 暗青灰色砂礫
12 暗灰褐色礫混じり土
13 淡褐色粘質土（炭多く含む）
14 淡褐色砂質土（炭多く含む）
15 灰褐色砂礫
16 暗灰褐色砂礫混じり粘質土
17 灰褐色混じり暗褐色砂質土
18 淡灰褐色砂質土
19 淡灰褐色砂質土
20 淡黄褐色砂～青灰色砂～暗灰褐色砂礫（中州ベース）

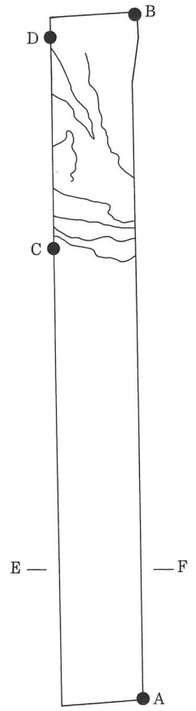


流路1
流路2
流路3
堤体土及び池底堆積土
粘土～シルト
砂礫
砂
岩礫

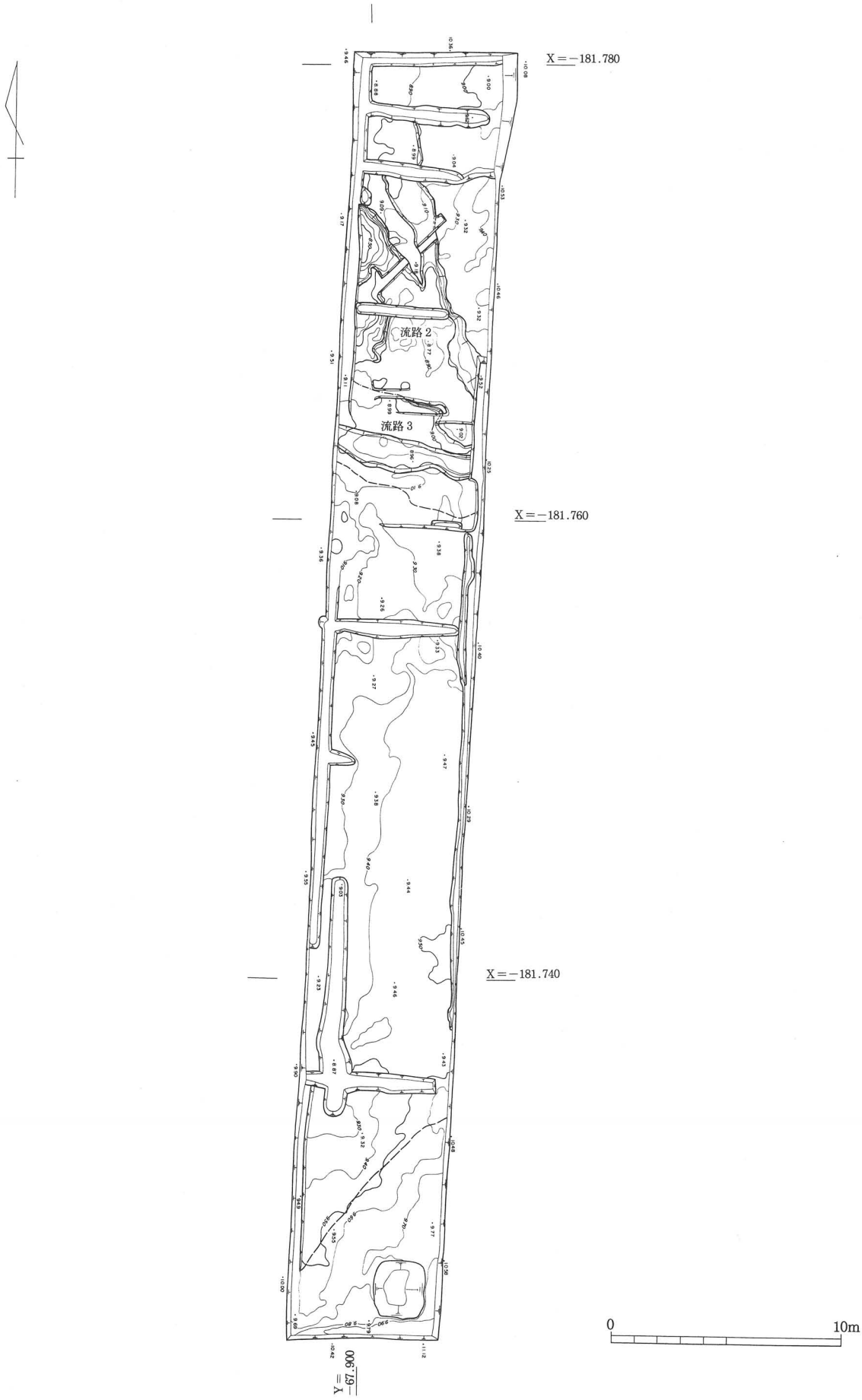


調査区横断（A12-18Aライン）

1 黄褐色礫混じり灰褐色砂礫
2 灰白色砂礫
3 赤褐色混じり灰褐色粗砂
4 赤黄褐色混じり淡灰褐色粗砂
5 暗黄褐色細砂
6 淡青灰色細砂
7 暗青灰色細砂
8 暗灰褐色砂礫



第5図　調査区断面図



第 6 図　調査区平面図

遺構面の標高は約8.9m～9.6mを測り、調査区の南東端より北西方向に向けて、緩やかにレベルを下げている。

第2節　遺構

今回の調査で確認された遺構は流路1～3である。流路はすべて調査区の中央部から北端部において、それぞれが重複する形で確認された。

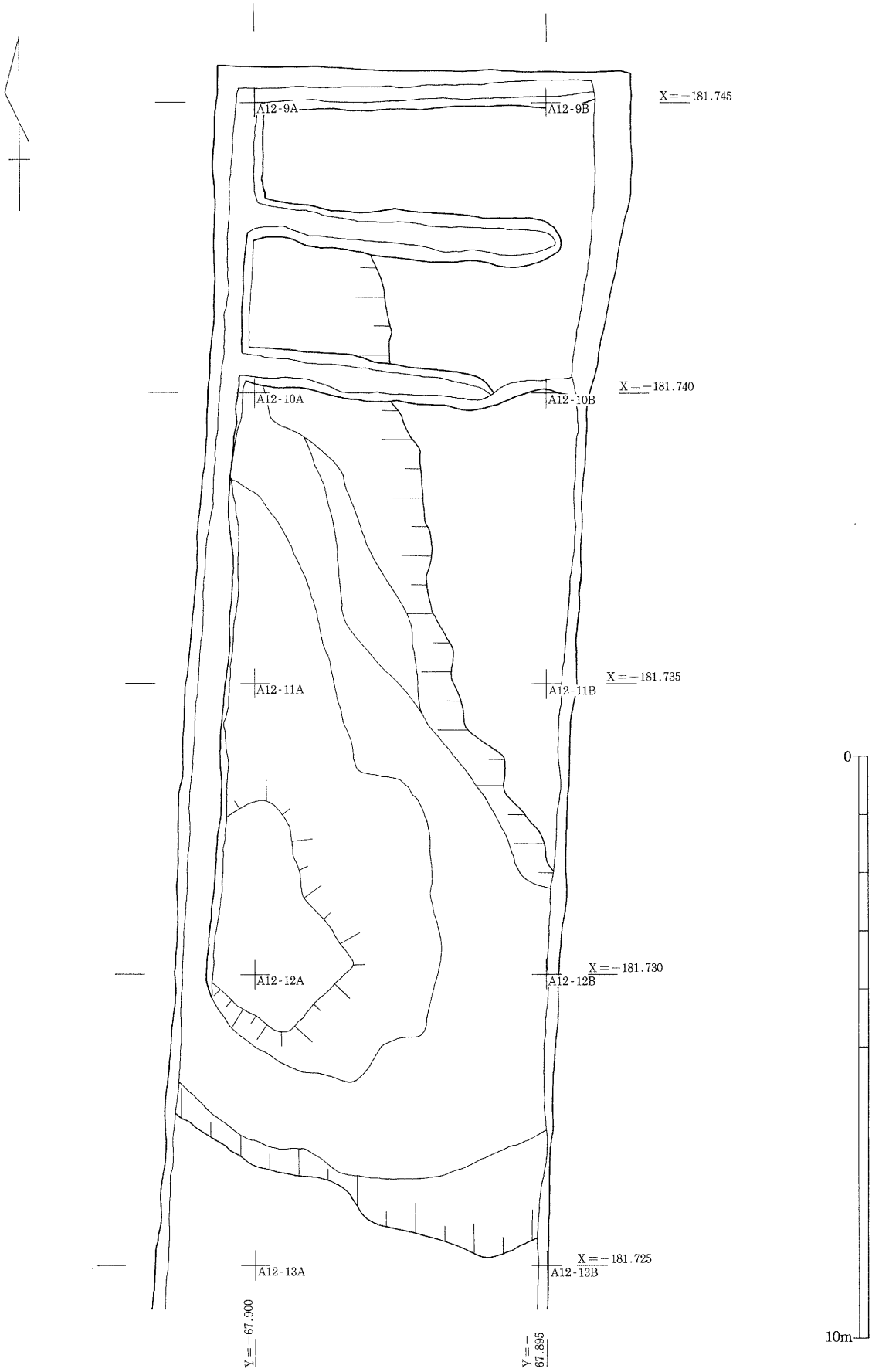
流路1（PL.6・第7図）

調査区の中央から北端で確認された自然流路である。調査区の地区割りではA11－9TからA12－12Aの範囲において確認された。調査区を東端から北西端に向かって斜めに横断しており、東西両端は調査区外へと伸びる。

平面的には東肩が南南東から北北西方向に向かって直線的に伸びるのに対し、西肩はほぼ東西方向に伸びており、全体に北西方向に扇状に開く形となる。検出長9m、最大幅8.3m、検出面からの深さは40cm～50cmを測る。断面形状は、東端側では逆台形をなすのに対し、西端側においては後述する中州状の高まりによって分断されており、それぞれ口の開いた椀形や逆台形を呈している。底部の標高は南東部において約8.50mを測り、北西端部では約8.10mを測る。東西端での比高差は最大で約40cm認められるが、全体には緩やかに北西方向に傾斜している。底部の状況はおおむね平坦であるが、流路西端部では先述したように中州状に残り、高まる地点がある。高まりは軟弱な砂礫層によって成るが、その上面にわずかに安定した淡黄褐色砂や青灰色砂が認められるものである。これは流れに緩急の差があり、その合流地点によどみが生じた結果、残されたものであると考えられる。

また流路のベースとなるのは基本的に灰褐色砂礫層であるが、一部流路の西肩部や北西端部においては暗黄褐色粘質土層がベースとなっている。いわゆる地山と同等の土質を持つものであり、その意味で地山と認定することのできるものであるが、この層は後述する流路2の底部、すなわち流路1の埋土最上部においても部分的に確認されるが、決して大きく拡がるものではない。これは先に述べたように調査区全体が大きな自然流路（＝男里川旧河道）に含まれているため、遺構面を形成する各土層の堆積が画一的なものではなかったことに起因し、またこのことはこの河道の流れが比較的緩やかであったか、また断続的であったために窪地状の地点に堆積し、形成されたものと考えられるものである。

埋土は流路の南側では暗灰褐色礫混じり土や暗オリーブ混じり暗黄褐色粘質土や暗青灰色砂礫であり、流路の北端部においては灰褐色砂礫、灰褐色混じり暗褐色砂質土、暗灰褐色砂礫混じり粘質土、淡黄褐色粘質土、淡灰褐色粘質土などである。これらのうち暗青灰色砂礫には暗黄灰褐色砂によるラミナが認められる。埋土より多くの弥生土器が出土したが、流路北西半部において、より顕著に出土している。


A12-9A
A12-9B
X=−181.745
A12-10A
A12-10B
X=−181.740
A12-11A
A12-11B
X=−181.735
A12-12A
A12-12B
X=−181.730
A12-13A
A12-13B
X=−181.725
X=−67.900
Y=−67.895
0
10m

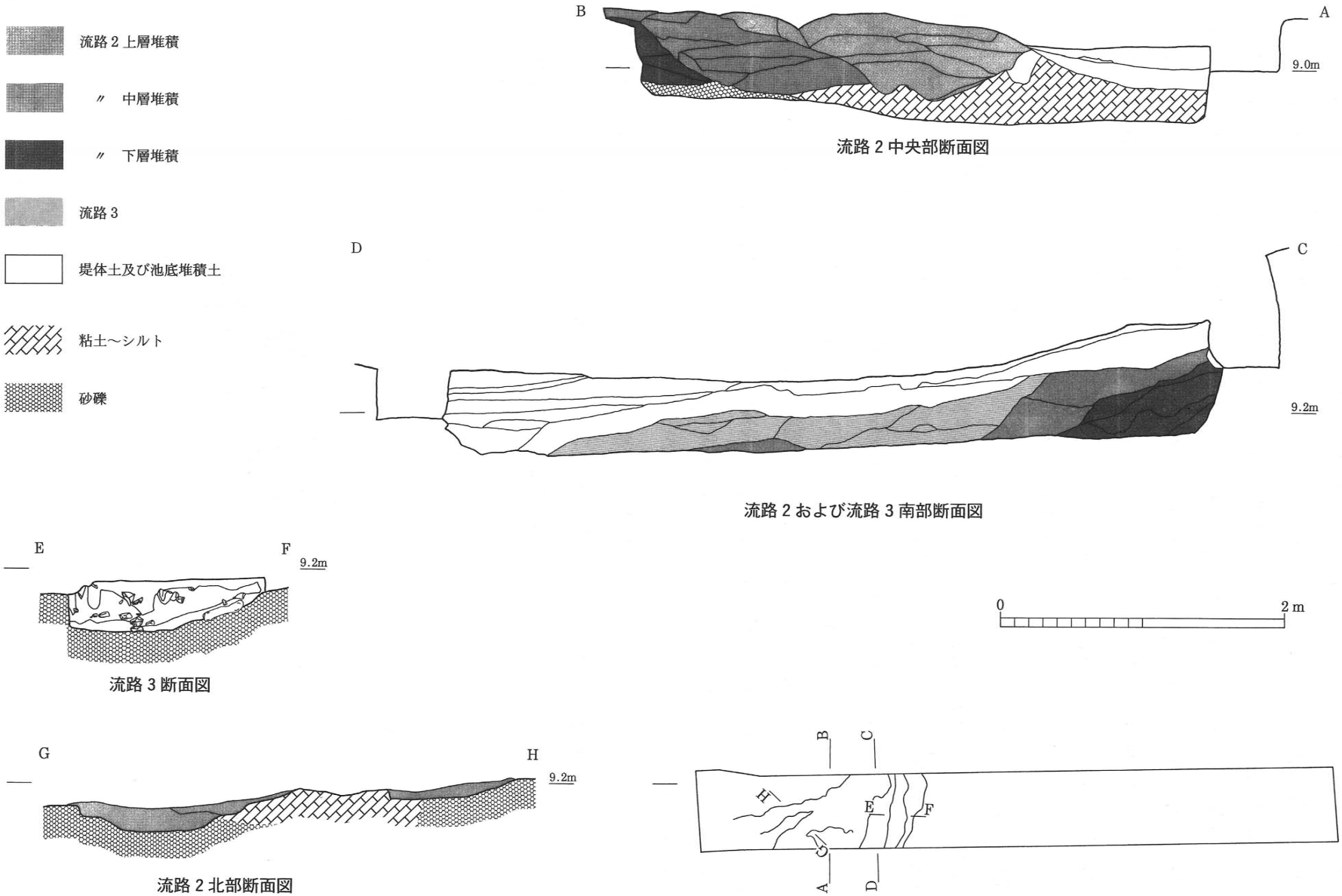
第7図　流路1平面図

流路２（ＰＬ.４・５・７、第６・８・９図）

流路１と重複する形で確認された流路である。平面的な拡がりは流路１とほぼ重なるが、南端部を流路３によって切られている。調査区地区割りにおいてはA11－9TからA12－12Aの範囲において確認された。

流路２はその両肩部が流路１と全く重複しているために、平面的には流路１と同じく北西方向に向かって扇状に開く。ただし南肩部については大きく削平を受けており、明確には確認されなかった。検出長９ｍ、最大幅８ｍ、検出面からの深さは15cm～60cmを測る。流路１と同様、調査区東端より北西方向に伸びるが、北西端部においてはそれぞれ幅約１～３ｍを測る２つの支流に分かれ、東側の支流はそのまま北北西方向に進むのに対し、西側の支流はより西寄りに向きを変えて伸びる。しかしこれらの支流は後述するそれぞれ堆積時期の異なる上層および中層の堆積が伴うもので

第８図　流路２遺物出土状況



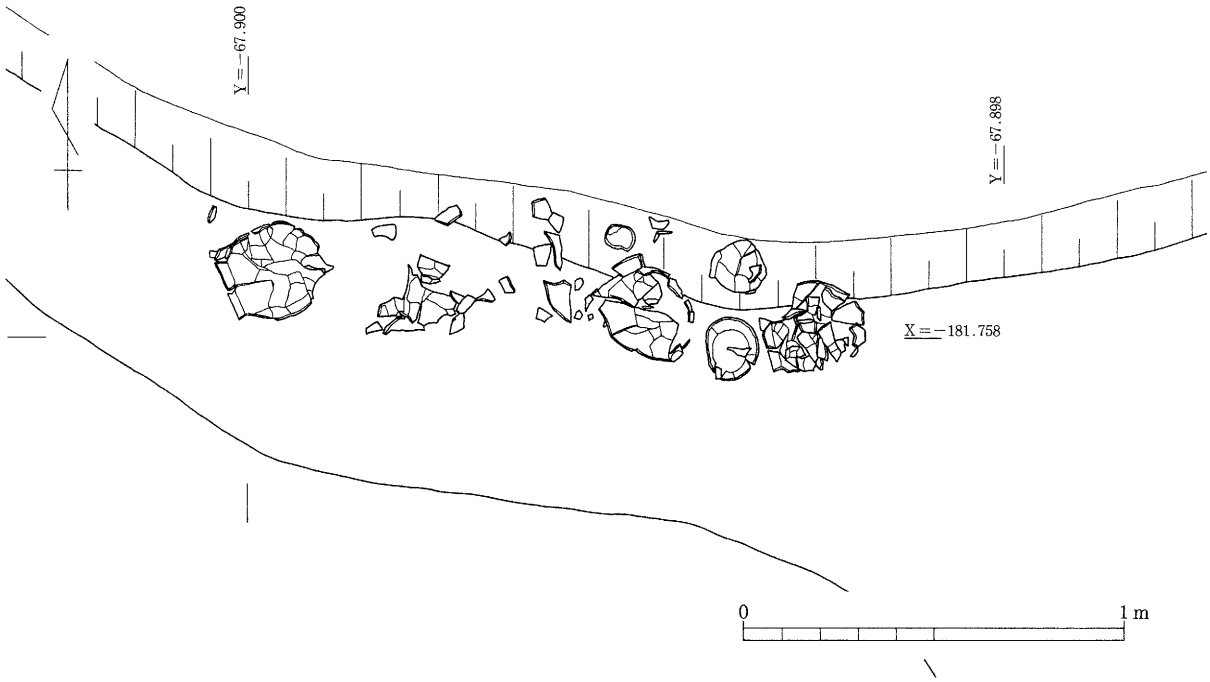
第 9 図　流路 2 および 3 断面図

あり、双方が同時に存在したのではなく、最終的に最も西寄りに方向を変えたものと判断される。

断面形状は北西端部以外の地点では非常に浅い口の開いた椀形を呈するが、北西端部においてはややいびつな逆三角形を呈する。底部の状況は若干の起伏があるが、おおむね平坦なもので、標高は南東端部では約9.0mを測り、中央部では約8.8mを測る。続く東側の支流では約9.1mとややレベルを上げのに対し、西側の支流ではおおむね約8.85mを測るが、北西端部においては約8.10mを測り、調査区外に向けて急激に落ち込んでいる。これらのベースとなるのは、流路南端部では暗灰褐色砂礫層であるが、中央部から北西端部にかけては暗黄褐色粘質土が認められる。これは流路1において確認された地山に近似した土層と同質と判断されるもので、特に流路の北西部において厚く堆積していることが確認された。

これらのベース層が形成されたのと同様、流路2の埋没過程も決して一様ではなく、特に流路中央部から北端部にかけては埋土の堆積状況により、大きく3期に分けることができる。これらはそれぞれに切り合い関係を持ち、それによると東から西に向かって、規模を縮小しながら埋没していったようである。便宜上、最も新しい堆積から古い堆積へ、それぞれ上層、中層、下層と呼称すると、下層堆積時には流路中央部において最大で幅約3mあったものが、上層では幅約2mにまで規模を縮小している。また下層には黄褐色混じり淡褐色砂質土、灰褐色混じり暗黄褐色シルトなどが堆積しているのに対し、中層や上層では砂礫が非常に多く含まれるようになる。このことから流路2では規模の縮小に伴い、流水の早さも少しずつ緩やかなものになっていったものと考えられる。以上のことから考えると、当初は流路1と同様の規模であったものが、徐々に規模を縮小しつつ、最終的には幅2mの溝状になって北西方向に流れていたものと考えることができる。

それぞれの埋土からは非常に多くの弥生土器が出土したが、出土した遺物からは、各層位間の



第10図　流路3遺物出土状況

時期差は窺えなかった。また流路東肩部において直径10～20cmを主とする多量の河岸礫と共に多量の土器溜まりが確認された。人為的に投棄されたものなどではなく、流路肩部によどみ、溜まったものであろう。

流路３（ＰＬ．４・８、第６・９・10図）

流路２の南端部において確認された流路である。調査区の地区割りではA11-11TからA12-12Aの範囲におさまる。流路２と同様、南肩については削平を受けており、明確には確認されなかった。流路は東南東から西北西方向に直線的に進むが、北に向けてやや湾曲しているところもある。また底部が一段深くなっており、最深部の平面形状は、溝状になりより直線的に伸びる。検出長6.5m、最大幅4.0m、底部最深部最大幅1.5m、検出面からの深さ40cmを測る。断面形状は西端部では浅い皿形を呈するが、底部最深部では北に向かってなだらかに落ちるいびつな三角形を呈している。底部の標高は東端で約8.9m、中央から西端にかけては約8.8mを測り、緩やかに西側に向かって傾斜している。ベースは流路１および２の埋土である暗灰褐色砂礫よりなる。

埋土の状況は流路東端から中央部では暗オリーブ色粘土やシルトであるのに対し、流路西端部では灰褐色混じり暗黄褐色粘質土や灰褐色礫混じり土となっている。

埋土からは多量の弥生時代から古墳時代にかけての遺物が出土したが、特に底部最深部においては、全体を覆いつくすように河岸礫や土器がぎっしりと詰まった状況であった。またこの最深部の南肩部に沿うように、長さ1.8mの範囲にわたって数個体の甕が横倒しになった状態で確認された。そのほとんどが口縁部を西に向けて倒れており、あたかも直立していたものが東からの圧力によって倒れ込んだものであろう。これら多量の遺物の出土状況から、調査区の直近に当該期の集落が存在している可能性が大きい。遺構の状況からは、調査区から現在の堤体を挟んだ東側に当該期の集落が展開する可能性が考えられる。

第３節　遺物

今回の調査では27.5ℓ容量の整理用コンテナに換算して約80箱の遺物が出土した。いずれも流路１～３からの出土であり、それ以外の包含層や堤体盛土などからはほとんど遺物が出土しなかった。以下にこれらのうち主なものを図示する。

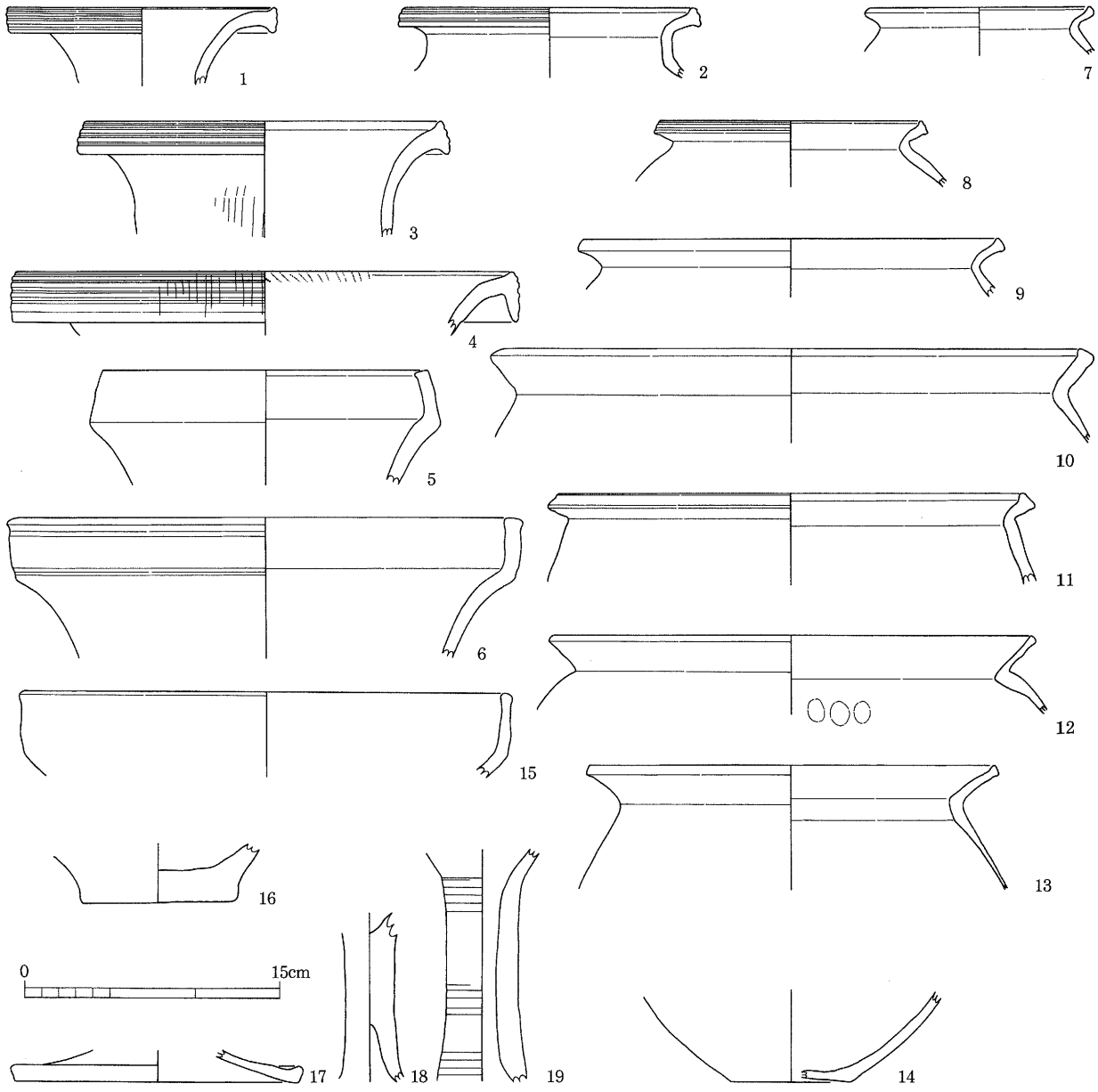
流路１出土の土器（ＰＬ.９、第11図）

流路１からは多くの弥生時代中期の土器が出土した。流路１出土遺物については特に摩滅の激しいものが多く、確認できうる器種としては広口壺、甕、高杯などがある。

１～６は広口壺である。広口壺には、口縁端部が下方に外傾するもの（１～３）、口縁端部が垂下するもの（４）、上方にまっすぐ立ち上がりいわゆる受け口状口縁をなすもの（５、６）がある。このうち１～３については口縁端部に凹線文を施し、５は疎で粗い簾状文が施される。６は口縁端部と屈曲点に凹線文が施される。

7～14は甕である。甕には口縁部径15cm前後の小形のもの（7、8）。25cm前後の中形のもの（9、11～13）。30cmを越える大形のもの（10）がある。このうち11については頸部から逆「L」字状に屈曲する口縁部を持ち、その他についてはいずれも「く」字状に屈曲する口縁部を持つものである。口縁端部の形態は上方にのみ拡張するもの（7、11）、上下双方に拡張するもの（8、9、13）、緩やかな平坦面をなすもの（10、12）に分けることができる。8は口縁端部に2条の凹線文を巡らす。全体に厚手の製品が多く認められるが、13は特に薄く仕上げられた器壁を持ち、その胎土には非常に多くの砂粒が含まれることから紀伊地方の影響が考えられられるものである。14は平底を呈する底部で、同様に薄く仕上げられた器壁を持つものである。

15および17～19は高杯である。15は皿形を呈する体部より上方に立ち上がる口縁部である。端



第11図　流路1出土の土器

部は緩やかな平坦面をなす。17は裾部である。緩やかな「ハ」字状に立ち上がるもので、端部は凹面をなす。いわゆるチョコレート色を呈し、生駒西麓産の製品と考えられるものである。18、19はともに脚部である。18は中実であり、大形の19は中空であり、両端のおよび中央下半にはそれぞれ4～5条の直線文を巡らす。

流路2出土の土器（ＰＬ.9・10、第12図）

流路2からは多くの弥生時代中期の土器が出土した。今回の調査においては最多の出土量があり、広口壺、直口壺、細頸壺、甕、高杯、台付き鉢、蓋、蛸壺などが確認された。

20～25は広口壺である。口縁端部が下方に外傾するもの（20～23）。大きく垂下するもの（24、25）が認められる。22、23は口縁端部がやや肥厚し、断面三角形をなす。20、22はともに頸部に波状文および直線文を巡らす。20は口縁端部に4条の凹線文を巡らし、22は上方に拡張された口縁端部にも波状文が施される。21は口縁端部を欠くが、頸部下半に5条の凹線文を巡らす。23は口縁端部に2条の凹線文を巡らす。24は下方に外傾する口縁端部に2条の凹線文を巡らし、その間に粗で粗い簾状文を施し、さらに円形竹管浮文を加える。25は垂下する口縁端部に凹線文を施し、円形竹管浮文を加えるものである。

直口壺（26）は逆「ハ」字状に外傾しつつ直線的に立ち上がる口縁部に2条の波状文を施し、波状文の間にさらに2条の突帯を貼り付けるものである。いわゆるチョコレート色に近い色調を呈し、生駒西麓産の製品と考えられる。

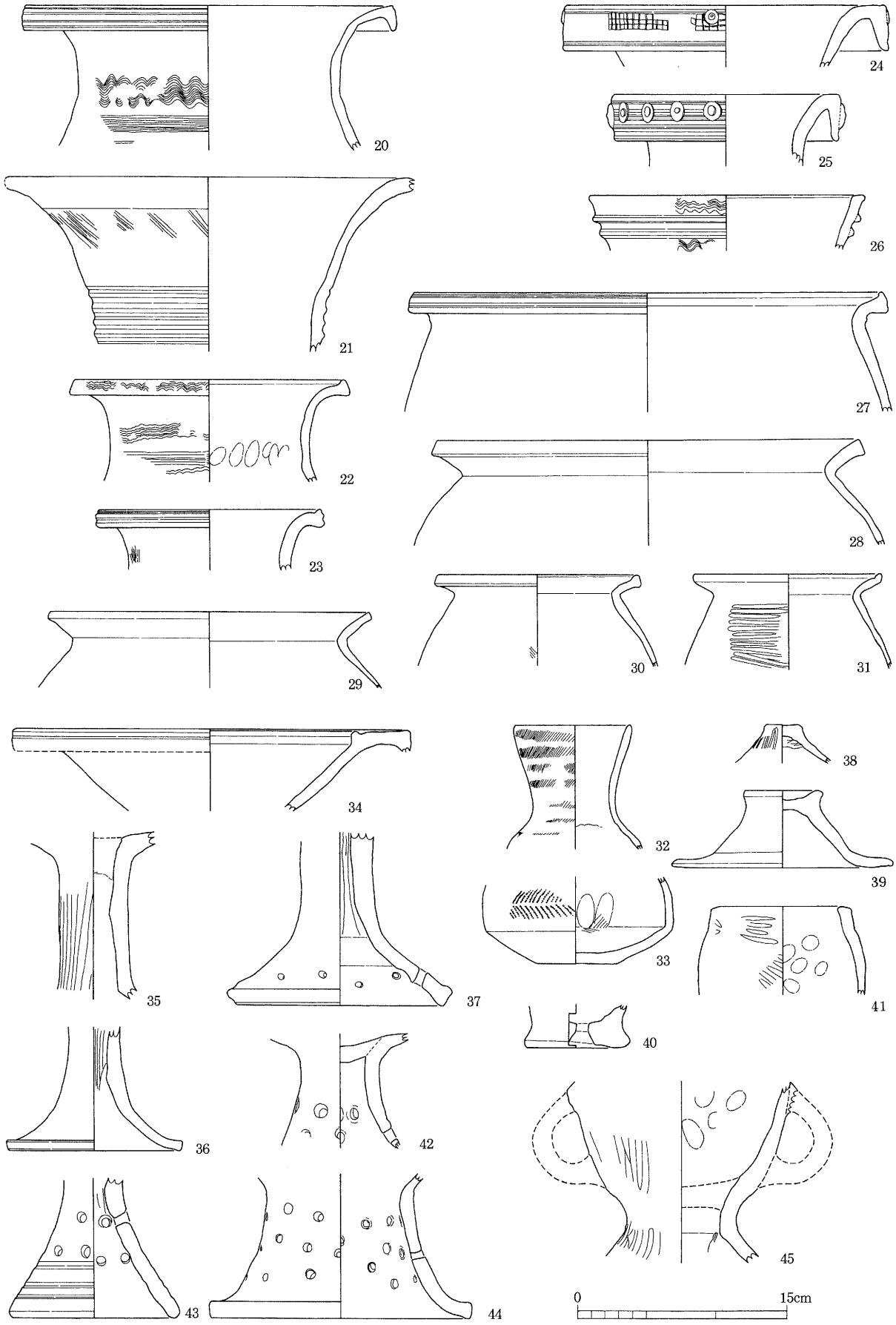
甕（27～31）には口縁部径10cm前後の小形の製品（30、31）、20cm前後の中形の製品（29)、30cm以上の大形の製品（27、28）がある。また27は直線的に立ち上がる頸部より逆「Ｌ」字状に外反する口縁部を持ち、その他についてはいずれも「く」字状に屈曲する口縁部を持つ。口縁端部の形状は上方にのみ拡張するもの（31）、上下双方に拡張するもの（27、30）、下方にのみ拡張するもの（28）、緩やかな平坦面をなすもの（29）に分けることができる。27は口縁端部に2条の凹線文を巡らす。31は外面に粗いタタキが認められる。

32、33は細頸壺である。32は頸部より外傾し直線的に立ち上がる口縁部を持ち、口縁端部より頸部にかけてハケ目を施し、さらに帯状にナデ消している。胎土に雲母を多く含み、搬入品と考えられるものである。33は同一器種の底部と考えられるもので、平底を呈する底部より「ハ」字状に立ち上がる体部が下半部において屈曲し横に張り出し、やや扁平で下膨れな算盤玉形を呈する胴部を持つものである。

34～37は高杯である。34は水平口縁をもつもので、垂下する口縁端部には凹線文が巡らされる。35～37は脚部、脚裾部であり、いずれも中空の棒状を呈する製品である。

38、39は蓋である。38は小形の製品でつまみ部分が垂直に立ち上がり、頂部は平坦面をなす。外面はヘラナデが施される。39は平坦な裾部より屈曲しわずかに内湾しつつ立ち上がる傘部から外傾するつまみ部分を持つ。頂部は大きな凹面をなす。裾部内面には煮沸に伴う焦化部分が認められる。

40は蛸壺である。口縁部より下を欠くが胴部に膨らみを持った円筒状の製品であろう。外面は



第12図　流路２出土の土器

粗いタタキが施される。

41は壺または甕の底部である。わずかに上げ底を呈し、中央に穿孔が認められる。

42～45は脚台および台付き鉢である。42～44は脚台であり、裾部より内傾し直線的に立ち上がるもの（42、43）、内湾しつつ立ち上がるもの（44）がある。いずれも脚部に多数の透孔が穿たれる。45は把手付きの台付き鉢である。直線的に立ち上がる鉢部に大きく「ハ」字状に開く脚部を持つ。外面は脚部、鉢部ともにヘラナデが施される。

流路３出土の遺物（ＰＬ.10・11、第13図）

流路３からは多くの弥生時代から古墳時代初頭の遺物が出土した。その大半は流路３底部最深部よりの出土である。甕、鉢、複合口縁壺、小形器台、高杯、製塩土器、蛸壺、土錘などがある。

46～58は甕である。54は布留式甕であり、その他は弥生系の甕である。弥生系の甕は口縁部径15cm前後のもの（46～50、53）と口縁部径20cm前後のもの（51、54）がある。いずれも頸部より「く」字状に屈曲し、口縁端部に緩やかな平坦面をなすものである。また弥生系甕のほとんどは右上がりのタタキによって成形されるが、底部56にのみ左上がりのタタキが認められる。底部は平底をなすもの（56、58）、底部中央が窪みいわゆるドーナツ状を呈すもの（57）がある。このうち57の内面にはハケ目が施され、58の内面には板状工具による圧痕が認められる。また56には中央に穿孔がみられる。54の布留式甕は頸部のハケ目がヨコナデによって消され、また口縁端部が突起し、鈍い平坦面をなすものである。

59は鉢である。丸底でやや深めの椀形の体部を持ち、口縁部が内湾しながら立ち上がる。

60～62は複合口縁壺である。無文のものと加飾されたものがある。60は無文で口縁端部に刻み目を有する。61は波状文および円形浮文が施され、口縁端部に刻み目を有する。62は内外面共にヘラミガキが施され、口縁部屈曲点付近には円形竹管浮文が施される。

63は小形器台である。椀型の受け部に内湾しつつ「ハ」字状に開く脚部を持ち、脚部には三方に透孔が穿たれる。

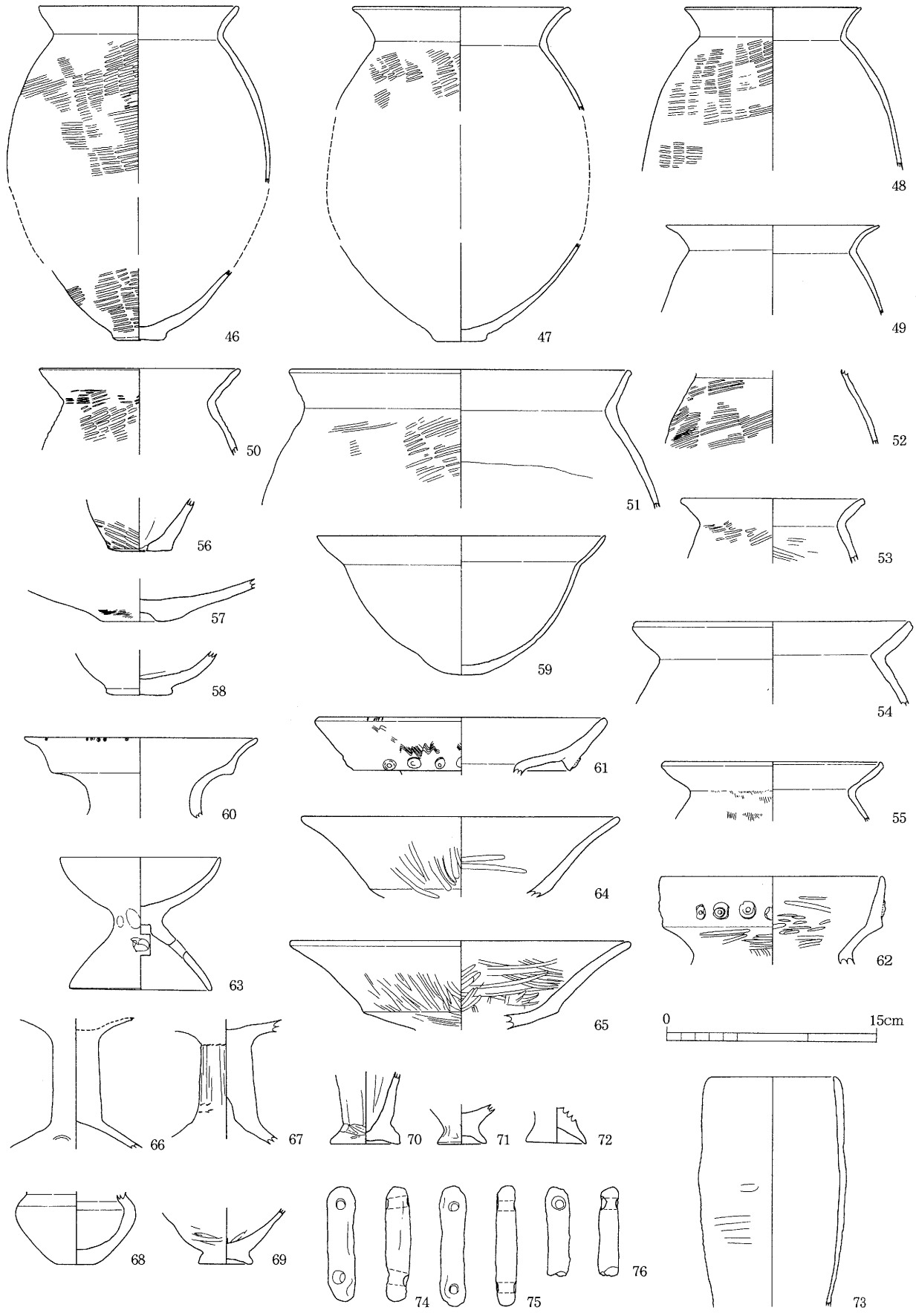
64～67は高杯である。64、65はともに杯底部と口縁部との境に明瞭な稜線をなすもので、いずれも内外面共にヘラミガキが施される。66は棒状の脚部に１つ以上の透孔を持つ脚部を伴う。67は外面にヘラナデが施される。

68、69は小形丸底壺および小形鉢である。68は平底に近い平坦な底面を持つ壺である。69は裾広がりの上げ底を持つもので、椀形の体部が伴うものと考えられる。

70～72は製塩土器の脚部である。70は扁平に開く脚部から直線的に立ち上がる体部を持ち、脚部との接合点は強いナデが施されるものである。

73は蛸壺である。円筒形を呈するもので、外面はタタキが施され、内面はナデが施される。

74～76は土錘である。いずれも棒状を呈し、両端に穿孔がみられるものである。重量は74が29.3ｇ、75は25.9ｇを測る。

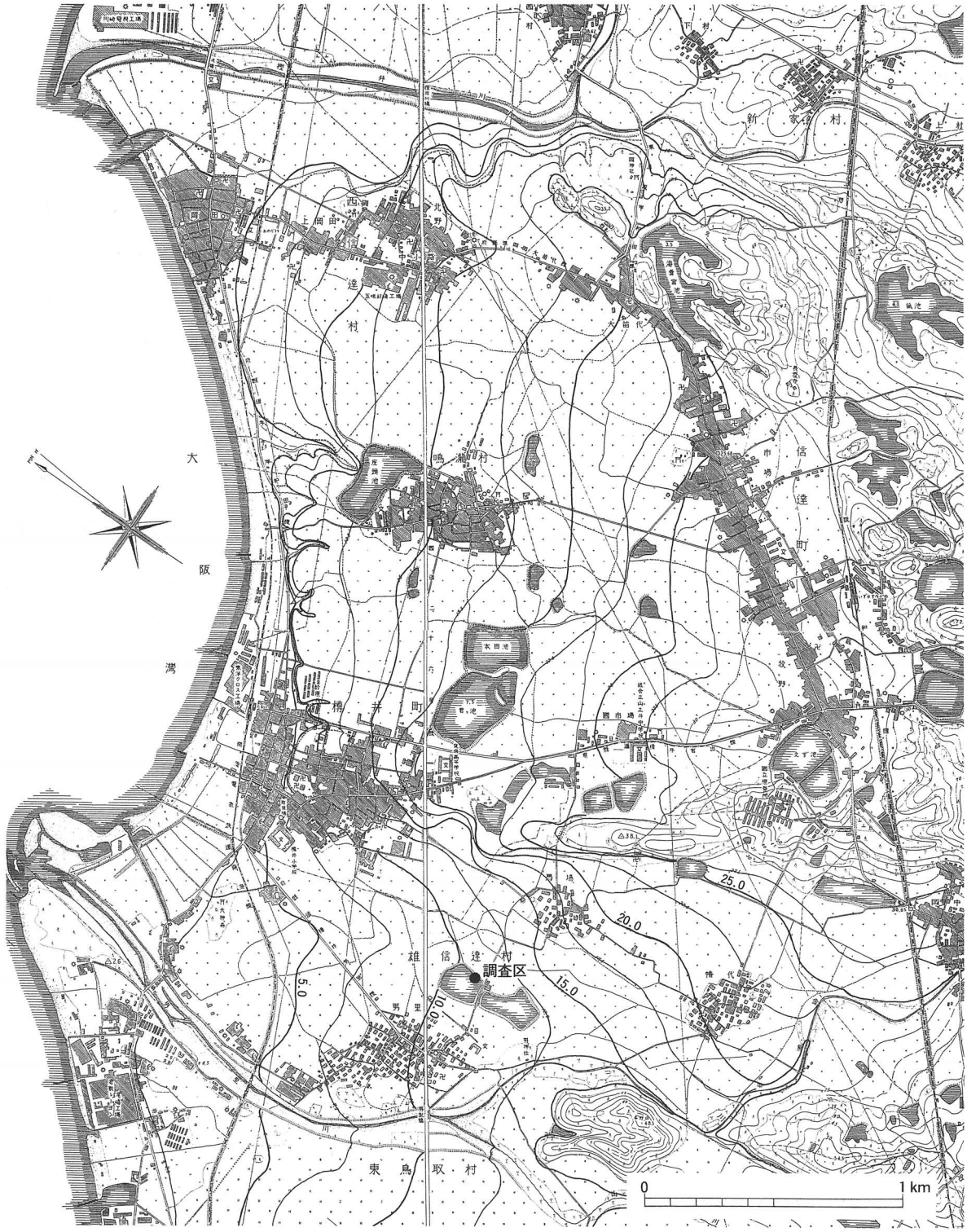


第13図　流路３出土の遺物

第５章　まとめ

第１節　男里遺跡の歴史的景観の復元（第14・15図）

今回の調査により双子下池の堤はほぼ全周の調査を終えたと考えられるので、一応のまとめとして、男里川旧河道の状況を概観してゆきたいと思う。縄文時代の遺構・遺物は池の北側の沖積段丘



第14図　泉南市域の地形図（樽井町役場「樽井都市計画区域全図」昭和28年を改変）

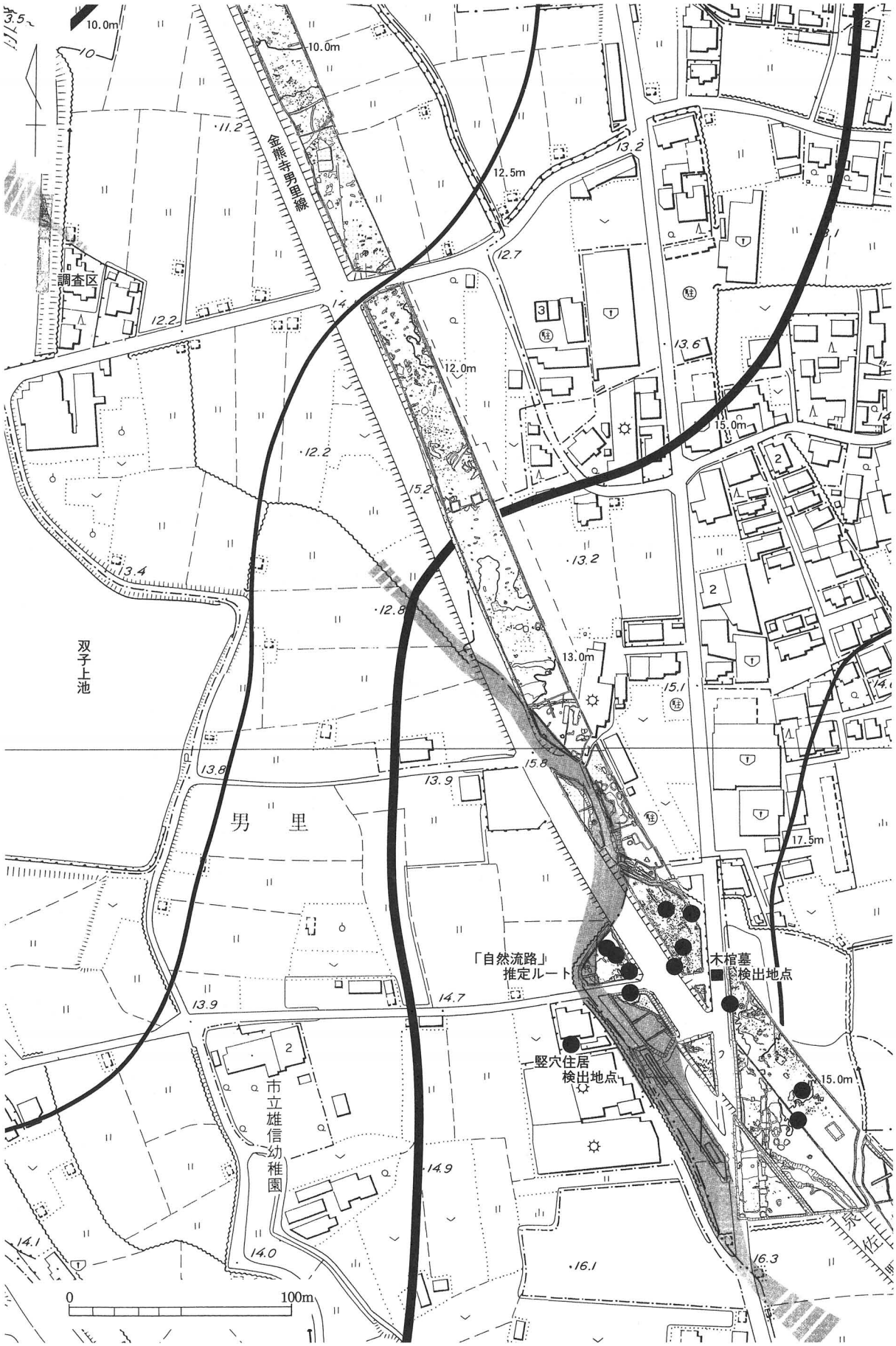
の黄色シルト層からいくつか出土している。弥生時代の住居跡等の遺構・遺物は右岸上流の都市計画道路敷きの調査で標高約13～16m地点で検出されている。住居跡群の長径（南北）約100m、短径（東西）約50mで、土壙墓群を含む。西側を画する溝（流路）は幅約20m、深さ２m以上を測る。今回の調査で検出された溝（流路）はその延長又は枝線にあたると考えられ、溝底のレベル差は５mある。これらの遺構は男里川の氾濫により不安定な状態で存在する。古墳時代にいたっても安定的な集落はみられず、男里遺跡の流路にⅤ様式から庄内期の土器及び製塩土器が流入している。標高５m前後を測る浜堤の後背湿地の縁辺部に形成された沖積段丘上に５世紀後半代の竪穴住居跡が出現する。標高10m前後の洪積段丘上にはようやく６世紀後半から掘立柱建物群が現れ、後に双子下池にかかる個所にもしがらみが設けられ、流路を制御する試みがなされる。つづく７～８世紀代には阪南市田山遺跡・山田海岸遺跡・波有手遺跡・泉佐野市湊遺跡等で多数の掘立柱建物群が展開する。大阪湾岸の蛸、塩、魚、貝類等の収穫物を集積し、中央へ搬出する機能の建物が建てられたかのように、一挙に出現するのである。史跡海会寺跡をはじめとするこの時期の泉南市域の遺跡の展開にもそうした痕跡は確認される。次の時期にはこうした中央の権力が衰退し、在地の勢力が平野を開発するために双子池を築造したのか、又は中央権力への収奪を強化せんと紀州への交通の要衝として街道を整備したのか、平安時代に至り池に堤が築かれる。この時期に男里川も現在の河道に近づけられ、海岸線に規則的な条里地割りが築かれ、集落も現在の配置に近づいていったと考えられる。その結果双子池の下流域は安定的に耕地化され、大型の掘立柱建物を中心とする集落群が展開する①。中世に至り恵まれた沖積段丘の黄色粘土を原料として海の恵みの蛸を収穫するため大蛸壺が製作・焼成される。それからの泉南市域は大規模な大蛸壺生産地域で、多くの焼成窯が検出されている。また、近世後期に砂糖、綿等換金作物の生産が発展し、河川敷などで作付けされたと記録されている。（表紙写真）

以上、今回迄の調査で得られた資料にもとづいて、男里遺跡の原始古代から中近世に至る遺構・遺物の変遷を推定した。

第２節　泉州南部における弥生時代中期の遺跡について（第15・16図、第１表）

今年度の調査では弥生時代中期から後期の流路が確認された。そこで泉州南部の既往の調査で得られた資料をもとに若干の事実を集め、弥生時代中期から古墳時代について概観してみたい。

泉州地区の弥生時代中期集落については既往の調査によりその展開過程がいくつか示されている。その多くは拠点集落を中心にして、各遺跡が共同体としてまとまっている様子を描いている。岸和田市地域について見ると、天の川流域に銅製品の出土や大溝の周辺に展開する住居群が見られる下池田遺跡②を中心に、春木川流域の栄の池遺跡③、津田川流域の畑遺跡、土生遺跡④などがあげられる。貝塚市域の土生遺跡、石才南遺跡⑤でも弥生時代中期の土器が出土している。泉佐野市地域では諸目遺跡⑥、三軒屋遺跡⑦、上之郷遺跡⑧および棚原遺跡⑨、船岡山遺跡等が認められ、いずれ



第15図　調査区周辺の遺構概略図

第16図　泉州南部における主要な弥生時代中期の遺跡分布

も小単位で地域世界を形成している。泉南市域では男里遺跡を拠点集落として位置付ける見解が提示されている。向井山遺跡は標高21～22mに立地し、方形周溝墓を検出しており⑩、さらに阪南市域でも神光寺遺跡⑪が見られ、岬町では淡輪遺跡⑫で方形周溝墓が検出されている。

以上の弥生時代中期の集落が泉州南部の各地域に展開する事実は既に指摘されているがその内容については余り語られていないのではないだろうか。事実、古墳時代には摩湯山古墳、久米田古墳群が存在し、国史跡貝塚丸山古墳、淡輪古墳群に見られる前方後円墳が出現する地域と、そうでない地域に分けられる。こうした格差が弥生時代中期における集落の内部のなんらかの差異又は後期、古墳時代初期の要因に起因するのであろう。このような各時代の各地域の遺構・遺物の差異を追求してなんらかの見通しを得たいと考える。

今回調査した男里遺跡では弥生時代中期集落は標高14m前後、竪穴住居跡が検出されるエリアは長径（南北）100m、短径50m程度である。方形周溝墓はなく、木棺墓が検出されている。周囲に流路及び溝がめぐる。（第15図）今回弥生時代の土器を出土した溝はその流路の延長と考えられる。弥生時代後期には近接して滑瀬遺跡が存在する。新家地域では弥生時代中期に新家遺跡が、新家オドリ山遺跡が後期に認められる。

岸和田市下池田遺跡は標高約16m、住居跡の範囲径約400mを測る。畑遺跡では連結式の方形周溝墓群が確認されている。弥生時代後期から土器製塩が行なわれた土生遺跡は標高17m、住居跡の範囲径40m以上を測る。同じく後期にはどぞく遺跡が標高60～70mに出現する。貝塚市石才南遺跡は標高29～30m、住居跡の範囲径約100mを測り、土壙墓群を含む。三軒屋遺跡では弥生時代中期の住居群を検出する集落範囲は500mの範囲の中に２～３ヶ所に分散している。標高は21～24mである。方形周溝墓は単独で存在し、近接して土壙墓群を伴なっている。棚原遺跡は標高49～56mで

第１表　泉州南部地域における弥生～古墳時代の遺跡の動向

	弥生時代中期の遺跡名	集落の展開する標高	墓制	銅鐸の有無	土器製塩	高地性集落	集落の展開する標高	前方後円墳
岸和田市	下池田遺跡 栄の池遺跡	16m 13m	畑遺跡 連結式方形周溝墓	流木銅鐸	土生遺跡 （弥生時代後期）	どぞく遺跡	60～70m	摩湯山古墳 久米田古墳群
津田川・近木川								
貝塚市	石才南遺跡	30m	土壙墓					丸山古墳
佐野川								
泉佐野市	三軒屋遺跡	21～24m	単発型＋土壙墓		湊遺跡 （弥生時代後半）	棚原遺跡	50m前後	
樫井川								
泉南市	向井山遺跡 男里遺跡	21～22m 12m	方形周溝墓 木棺墓	林昌寺銅鐸		滑瀬遺跡 新家オドリ山遺跡	50～75m 38m	
男里川								
阪南市	神光寺（蓮池）遺跡	25m	単発型方形周溝墓		尾崎海岸遺跡 （古墳時代前期）			
茶屋川								
岬町	淡輪遺跡	25m	単発型方形周溝墓					淡輪古墳群

径約80mの弥生時代後期の集落が存在する。阪南市の神光寺遺跡は標高25mで、方形周溝墓が確認されていると言う。岬町淡輪遺跡の方形周溝墓は単独で、標高25mに位置している。

以上のように、洪積段丘の低位から中位段丘に立地していた弥生時代中期の集落跡周辺から採集される資料を概観すると、方形周溝墓、集落立地、集落範囲などの差異より、海岸部や段丘部、丘陵部、山間部の共同体の拡張・分散により、共同体や地域間の方形周溝墓・銅鐸祭祀の連合から、沖積段丘および洪積段丘に展開する集落を核として、前方後円墳の時代に向かっていく様子がうかがえるのである。

これらのことから、中期の方形周溝墓群という墓制で共同体内の結合が累代的に確認され、流木銅鐸で共同体祭祀を行ない、弥生時代後期の土器製塩を行った、岸和田市地域の遺跡群が広い沖積段丘と長い海岸平野部を活用して農耕生産と狩猟採集のシステムを共同体間の意識の紐帯として確立させた。その結果摩湯山古墳を産み、続いて久米田古墳群を築造してゆく政治関係を岸和田地域に形成し、泉州南部地域を代表した集団となったと考えられるのである。そのようなシステムを確立しえた遺跡群は岸和田市地域以南に存在しえなかったのである。しかしこのことがただ牧歌的な泉州南部の弥生時代を物語ることになるのではない。むしろ、このことこそが和泉山脈を媒介とした泉州南部と紀伊との力関係、大阪湾を媒介とした淡路島から摂津・紀伊にかけての大阪湾沿岸の漁業集団との地域間交流を通して古墳時代への試行錯誤が行われたことを物語る地域の歴史の独自性を示すものと考えられる。以上が地域の歴史を学習する歴史教育の教材として評価されなければならないことを認識しておきたい。

註 ① 財団法人大阪府埋蔵文化財協会『男里遺跡』（1996）
② 岸和田遺跡調査会『下池田遺跡第２次発掘調査報告』（1987）
③ 岸和田遺跡調査会『栄の池遺跡』（1979）
④ 岸和田市教育委員会『土生遺跡発掘調査概要』（1976）
貝塚市教育委員会『貝塚市遺跡群発掘調査概要14』（1992）
⑤ 財団法人大阪府埋蔵文化財協会『石才南遺跡発掘調査報告書』（1988）
⑥ 泉佐野市教育委員会『諸目遺跡』（1992）
泉佐野市教育委員会『諸目遺跡』（1994）
⑦ 泉佐野市教育委員会『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要８』（1988）
大阪府教育委員会『三軒屋遺跡発掘調査概要Ⅲ』（1989）
泉佐野市教育委員会『三軒屋遺跡』（1993）
泉佐野市教育委員会『三軒屋遺跡』（1994）
⑧ 泉佐野市教育委員会『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要』（1997）
⑨ 財団法人大阪府埋蔵文化財協会『棚原遺跡発掘調査報告書』（1995）
⑩ 泉南市教育委員会『泉南市向井山遺跡発掘調査報告書』（1972）
⑪ 阪南町教育委員会『神光寺遺跡発掘調査報告書』（1982）
⑫ 大阪府教育委員会『淡輪遺跡発掘調査概要Ⅵ』（1984）

最後に泉州南部の市町の文化財担当者の方々に短時間に無理をお願いしてとにかく多種類の土器の胎土分析ができたので今後の比較資料として活用されることを期待するとともに、三辻先生の分析資料を掲載して皆様方にお礼を申し上げたい。泉州をグローバルに観察して個性的な歴史観を創造したいと考える。

付章Ⅰ　泉州南部の遺跡出土土器の蛍光X線分析

奈良教育大学　三辻利一

1）はじめに

古代土器の産地問題を研究するためには、生産地がわかっている土器が必要である。須恵器の窯跡は全国各地に残っており、そこからは大量の破片が出土している。産地問題の研究には窯跡出土須恵器は絶好の条件を備えている。そのために、産地問題の基礎研究の対象として須恵器が選び出された。

しかし、窯跡出土須恵器が産地問題の研究のための絶好の条件をもっているとはいえ、窯跡出土須恵器が窯ごとに一定の化学特性をもたない限り、何の役にも立たないのである。

運よく、筆者は産地問題の研究の当初、エネルギー分散型（２次ターゲット方式）の蛍光X線分析装置を使用した。この装置を使うと、測定しつつ、土器の蛍光X線スペクトルを見ることができる。このスペクトルに現れる主要な元素はSi、Al、K、Ca、Ti、Fe、Rb、Sr、Y、Zrの10元素である。このうち、軽元素側の分解能が悪いために、AlとSiは十分分解できないので、測定することを断念した。また、YのKαにはRbのKβが、また、ZrのKαにはSrのKβが重なり、Y、ZrのKの線の強度を正確に測ることが出来ないので、Y、Zrも分析対象からはずした。Tiは観測される強度が低いため、これも測定しないことにした。こうして、残るK、Ca、Fe、Rb、Srの5元素を分析することになった。

分析データを理解するためには、図形化するとよい。どの元素を組合わせた分布図を作成するかが問題になった。５元素のうち、K、CaはTiを２次ターゲットとして真空中で測定した。Fe、Rb、SrはMoを２次ターゲットとして空気中で測定した。つまり、同一試料を２次ターゲットを入れ換えて２度測定したのである。したがって、真空にして同時に測定されるK、Caが組み合わされることになった。しかもうまいぐあいに、K、Caは土器（粘土）中の主成分元素であった。

他方、空気中で測定されるFe、Rb、Srのうち、Feは主成分元素であるが、Rb、Srは微量元素である。しかも、RbはKと、また、SrはCaと周期表上同族元素であり、イオン半径も似ている。このことから、RbとSrを組合わせてRb－Sr分布図を作成することにした。

こうして、K－Ca、Rb－Srの両分布図上で各地の窯跡出土須恵器の化学特性を比較することになった。

この分布図上で窯跡出土須恵器はよくまとまって分布し、一定の化学特性をもつことが証明された。しかも、両分布図上で地域差を示すこともわかった。

こうして、各地の窯跡出土須恵器を両分布図上で比較し、全国各地の窯跡出土須恵器には地域差があることも長年の分析データの集積の結果、明らかになった。

この結果、消費地の遺跡出土須恵器の化学特性を窯跡に結び付けることによって須恵器の産地推定ができることがわかった。

第2表　分析データ

遺跡名		No.	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
(貝塚市)	津田北遺跡	11-1525	No.1	たこ壺	0.620	0.144	1.38	0.609	0.501	0.314
	津田北遺跡	1526	No.2	土師　カメ	0.523	0.315	1.91	0.450	0.430	0.268
	津田北遺跡	1527	No.3	土師	0.713	0.351	2.99	0.502	0.919	0.327
	貝塚寺内町遺跡	1528	No.4	土師　羽釜	0.482	0.224	1.53	0.562	0.561	0.132
	貝塚寺内町遺跡	1529	No.5	塩壺	0.641	0.153	1.49	0.678	0.545	0.392
(泉佐野市)	諸目遺跡	11-1530	No.6	弥生　壺	0.376	0.609	2.74	0.304	0.457	0.258
	諸目遺跡	1531	No.7	弥生　カメ	0.439	0.531	2.66	0.333	0.414	0.240
	諸目遺跡	1532	No.8	弥生　カメ	0.462	0.097	1.55	0.533	0.305	0.117
	諸目遺跡	1533	No.9	須　カメ	0.340	0.075	2.16	0.459	0.270	0.129
	諸目遺跡	1534	No.10	須　カメ	0.428	0.134	1.66	0.527	0.403	0.279
	諸目遺跡	1535	No.11	須　杯	0.336	0.076	2.43	0.393	0.248	0.127
	諸目遺跡	1536	No.12	須　杯	0.449	0.105	2.65	0.482	0.343	0.242
	諸目遺跡	1537	No.13	須　杯	0.403	0.043	3.04	0.512	0.190	0.151
	諸目遺跡	1538	No.14	縄文　深鉢	0.458	0.403	1.62	0.601	0.952	0.186
	三軒屋遺跡	1539	No.15	弥生　壺	0.587	0.390	1.63	0.368	1.32	0.431
	上町東遺跡	1540	No.16	羽口	0.314	0.144	2.47	0.455	0.301	0.132
	上町東遺跡	1541	No.17	瓦器	0.392	0.061	2.84	0.454	0.204	0.115
	南中安松遺跡	1542	No.18	羽口	0.559	0.074	1.36	0.554	0.263	0.112
	樫井西遺跡	1543	No.19	古代須　カメ	0.506	0.097	2.68	0.606	0.301	0.311
	上之郷遺跡	1544	No.20	羽口	0.610	0.344	2.02	0.575	0.888	0.344
	岡本廃寺	1545	No.21	瓦漏	0.572	0.134	2.08	0.539	0.481	0.396
	宮ノ前遺跡	1546	No.22	瓦漏	0.412	0.118	1.65	0.482	0.355	0.108
	樫井西遺跡	1547	No.23	土師　カメ	0.434	0.212	2.35	0.386	0.271	0.203
	若宮遺跡	1548	No.24	羽口	0.523	0.179	1.66	0.548	0.420	0.254
	日根野遺跡	1549	No.25	白土器　皿	0.532	0.161	0.696	0.771	0.346	0.121
(泉南市)	宮南遺跡	1550	No.30	弥生　高杯	0.424	0.177	2.81	0.455	0.278	0.144
	岡田東遺跡	1551	No.31	縄文？	0.480	0.512	1.87	0.429	0.802	0.425
	戎畑遺跡	1552	No.47	大蛸壺	0.373	0.204	1.63	0.552	0.347	0.086
	戎畑遺跡	1553	No.48	和泉瓦器	0.347	0.094	3.26	0.312	0.310	0.276
	戎畑遺跡	1554	No.49	白土器　皿	0.523	0.087	1.19	0.650	0.368	0.137
	中小路西遺跡	1555	No.50	瓦器椀	0.324	0.056	2.22	0.403	0.300	0.127
	新伝寺遺跡	1556	No.51	赤色平瓦	0.730	0.170	2.43	0.629	0.461	0.341
	新伝寺遺跡	1557	No.52	瓦器	0.455	0.029	1.81	0.532	0.272	0.074
	海会寺跡	1558	No.53	塼	0.565	0.082	1.34	0.627	0.307	0.168
	海会寺跡	11-1559	No.54	赤色平瓦	0.513	0.078	1.89	0.577	0.339	0.187
	海会寺跡	1560	No.55	赤色丸瓦	0.573	0.081	1.68	0.689	0.538	0.354
	新家遺跡	1561	No.56	土師　カメ	0.432	0.306	2.25	0.484	0.382	0.212
	新家遺跡	1562	No.57	土師　カメ	0.479	0.183	2.04	0.543	0.435	0.135
	新家古墳群	1563	No.58	須　カメ	0.524	0.218	1.99	0.606	0.437	0.370
	新家古墳群	1564	No.59	須　杯	0.356	0.080	2.66	0.461	0.268	0.152
	海会寺跡	1565	No.60	塼	0.473	0.080	1.64	0.536	0.294	0.138
	海会寺跡	1566	No.61	軒丸瓦	0.340	0.090	1.98	0.458	0.307	0.070
	海会寺跡	1567	No.62	軒丸瓦	0.517	0.082	1.82	0.723	0.460	0.338
	海会寺跡	1568	No.63	軒丸瓦	0.429	0.103	2.63	0.584	0.318	0.111
(阪南市)	箱作今池遺跡	1569	No.65	瓦質土器	0.447	0.160	2.81	0.435	0.432	0.202
	下出遺跡	1570	No.66	瓦器	0.399	0.088	2.02	0.548	0.322	0.137
	神光寺	1571	No.67	平瓦	0.431	0.024	3.45	0.431	0.123	0.055
	波有手遺跡	1572	No.68	皿	0.456	0.111	2.96	0.385	0.331	0.312
	馬川遺跡	1573	No.69	茶色粘土	0.527	0.174	2.20	0.543	0.444	0.259
	馬川遺跡	1574	No.70	茶色粘土	0.555	0.135	1.95	0.675	0.375	0.186
	田山東遺跡	1575	No.71	蛸壺	0.489	0.174	1.14	0.521	0.601	0.341
	平野寺跡	1576	No.72	平瓦	0.622	0.188	1.84	0.622	0.547	0.377
	馬川遺跡	1577	No.73	室町平瓦	0.531	0.115	1.53	0.602	0.375	0.203
	内畑遺跡	1578	No.74	近世瓦	0.698	0.346	2.59	0.609	0.543	0.560
	波有手遺跡	1579	No.75	須　杯	0.464	0.107	2.70	0.596	0.239	0.222
	平野寺跡	1580	No.76	近世瓦	0.426	0.118	1.80	0.504	0.398	0.319
	根来遺跡	1581	No.77	蛸壺	0.507	0.084	1.58	0.602	0.416	0.243
	箱作今池遺跡	1582	No.78	瓦器	0.316	0.190	6.28	0.180	0.271	0.182
	尾崎海岸遺跡	1583	No.79	古墳　製塩	0.551	0.403	1.44	0.451	0.861	0.245
	馬川北遺跡	1584	No.80	縄文（河内）	0.385	1.61	5.44	0.223	0.660	0.164
	道弘寺跡	1585	No.81	平瓦（縄叩き）	0.567	0.153	3.56	0.448	0.301	0.142
(岬町)	西小山古墳隣接地	1586	No.82	須　円筒埴輪	0.380	0.047	1.96	0.486	0.215	0.116
	番川下流遺跡	1587	No.83	白土器	0.489	0.073	2.05	0.543	0.307	0.156
	番川下流遺跡	1588	No.84	土錘	0.628	0.204	2.41	0.623	0.365	0.365
	番川下流遺跡	1589	No.85	土師　カメ	0.241	0.284	3.86	0.192	0.465	0.215
	西小山古墳隣接地	1590	No.86	須　円筒埴輪	0.441	0.081	2.07	0.548	0.258	0.172
	西小山古墳隣接地	1591	No.87	土師　円筒埴輪	0.417	0.065	3.01	0.404	0.220	0.142
	番川下流遺跡	1592	No.88	製塩土器	0.500	0.114	2.99	0.595	0.365	0.105
	番川下流遺跡	11-1593	No.89	須　カメ	0.455	0.080	2.83	0.509	0.433	0.430
	番川下流遺跡	1594	No.90	須　高杯	0.478	0.142	2.61	0.629	0.322	0.277
	淡輪遺跡	1595	No.91	中世　土師	0.430	0.675	4.01	0.343	0.265	0.169
	淡輪遺跡	1596	No.92	縄文	0.602	0.411	2.35	0.542	0.760	0.341
	淡輪遺跡	1597	No.93	縄文	0.392	0.530	1.96	0.495	1.16	0.383

現在は分布図上での定性的な産地推定ではなく、２群間判別分析法という統計学の方法を導入し、定量的に産地を推定できるまでになっている。

窯跡が残っている土器については須恵器と同様にして、産地問題の研究を進めることができる。しかし、生産地である窯跡が残っていない土器（埴輪、土師器など）は産地問題の研究ではなく、胎土研究としてとり上げられる。そのときに使用する因子は須恵器の産地問題の研究で主役を演じたK、Ca、Rb、Srの4元素である。土器のもつ考古学的条件と分析データを上手く結び付けると、考古学的に有意な情報を引き出すことは可能である。

以上が筆者が展開する古代土器の元素分析に関する研究の概要である。

本報告では泉佐野市、貝塚市、阪南市、岬町のいくつかの遺跡から出土した、種々の土器の蛍光Ｘ線分析による試験的な胎土研究の結果について報告する。

２）分析法

土器資料はすべて、表面を研磨して付着物を除去したのち、胎土部分をタングステンカーバイド製乳鉢の中で100メッシュ以下に粉砕した。粉末試料は塩化ビニール製リングを枠にして、約13トンの圧力を加えてプレスし、内径20㎜、厚さ５㎜のコイン状錠剤を作成し、蛍光Ｘ線分析用の試料とした。

錠剤試料は試料ホールダーに固定した。48個の試料ホールダーが自動試料交換機にセットされ、完全自動式蛍光Ｘ線分析装置でNa、K、Ca、Fe、Rb、Srの各元素のKα線の強度を測定した。標準試料には岩石標準試料、JG－1を使用した。

３）分析結果（第17・18図、第２表）

全資料の分析データは第２表にまとめられている。全分析値は同時に測定した岩石標準試料、JG－１による標準化で示されている。

標準化値を使って、%濃度やppm濃度に変換することは可能であるが、データ解析には標準化値を使用する方が簡便であるので、筆者は通常、標準化値を使ってデータ解析を行っている。

今回はいくつもの遺跡から出土した土器を、しかも、縄文土器から中世の瓦器にいたるまでの様々な土器を分析しており、伝播・流通論の展開のための資料採集とは違った形で資料が採取されたので、データ解析も須恵器、埴輪、瓦、土師器といった具合いに、土器の器種に分けて行われた。

須恵器のデータから説明する。今回分析した須恵器は泉佐野市の諸目遺跡、樫井西遺跡、泉南市の新家古墳群、岬町の番川下流遺跡から出土したものである。このうち、泉佐野市の樫井西遺跡から出土したものは古式須恵器である。これらの須恵器の両分布図は第17図①に示されている。いずれも、陶邑領域に対応しており、近畿地方南部の最大の須恵器窯群である陶邑窯群の製品と推定される。

第17図②には埴輪の両分布図を示す。３点の埴輪は岬町の西小山古墳群隣接から出土したもの

で、No.82、86の2点は須恵質埴輪である。図②からわかるように、3点ともまとまって分布しており、第2表からもわかるように、Fe、Na因子でも類似しているところから、同じところで製作された埴輪と推定される。しかも、Ca、Sr量が少ないという特徴から、河内窯群の製品ではなく、和泉側で製作された埴輪である。図①と比較すると、陶邑産の須恵器と類似した胎土をもつことがわかる。今回のデータではこれ以上のことはいえない。これ以上のことに言及しようとすると、1基の古墳から多数の埴輪を分析するか、また、近隣のいくつもの古墳出土埴輪と胎土を比較することが必要である。

第17図③には瓦と塼の両分布図を示す。瓦も塼も窯で焼成する点では須恵器と似ている。窯跡さえ見つかれば須恵器と同じようにして産地問題を考えることができる。しかし、残念ながら、目下のところ、瓦窯は須恵器窯ほど発掘調査されていないのが現状である。

図③を見ると、瓦もまた、両分布図で陶邑領域にほぼ対応し、地元、泉南地域で製作されたものであることを示唆している。

今回分析した瓦は泉南市の海会寺跡、泉南市の新伝寺、阪南市の神光寺、道弘寺から出土した古代瓦と、阪南市の平野寺出土中世瓦（No.72）、馬川出土室町時代の瓦（No.73）と内畑出土の近世瓦（No.74）、平野寺出土近世瓦（No.76）である。No.72、74はK－Ca分布図で集団から少しずれており、胎土が異なることを示している。また、No.67はRb－Sr分布図で集団から少しはずれて分布しており、これも胎土は異なると推察される。古代瓦の多くは両分布図でまとまって分布しており、阪南地域で製作された瓦と推察されるが、新伝寺の赤色平瓦（No.51）はK－Ca分布図で海会寺の赤色平瓦（No.54、55）とは少しずれており、別場所で造られた瓦とみられる。

次に、土師系土器の両分布図を第17図④に示す。須恵器、埴輪、瓦に比べて、かなりばらついて分布していることがわかる。このことはこれらが1ヶ所で作られたものではなく、あちこちで作られたものであるということを示している。例えば、No.2、3は貝塚市の津田北遺跡から出土した蛸壺と土師器甕である。図④をみると、両者は両分布図で大きくずれて分布しており、別胎土であることは明白である。しかし、泉南市の新家遺跡から出土した土師器甕（No.56，57）は近接して分布しており、同じ胎土である可能性をもつ。これに対して、岬町の番川下流遺跡から出土した土師器甕（No.85）は両分布図で他の土師系から離れて孤立して分布しており、これと同じ胎土をもつ土師器は他にないことからわかる。製塩土器にいたっては全くばらばらであり、No.5、79、88はそれぞれ、別場所で作られたものだと推察される。

一般に、土師器の胎土を分析すると、このようにばらついて分布することが多い。このことは土師器は手軽に製作できる土器であるので、あちこちのいくつもの場所で製作されたことの反映であるのかもしれない。ここに、土師系土器の胎土研究の難しさがある。

第18図⑤には羽口の両分布図を示す。No.4は貝塚市の津田北遺跡の羽釜であり、他の4点はいずれも、泉佐野市の上町東、南中安松、上之郷、若宮の各遺跡から出土した鞴の羽口である。No.4，20の2点を除いて他の3点は和泉的胎土をもつ。恐らく、これらも地元で製作されたものであろう。No.

20の羽釜は大きくずれており、異質の胎土をもつが、この点については比較する材料がないので、何ともいえない。

第18図⑥には弥生土器の両分布図を示す。No.6，7とNo.8，30はそれぞれまとまって分布しており、同じ胎土をもつといえよう。No.6，7，8は泉佐野市の諸目遺跡から出土した弥生土器（甕）であり、No.30は泉南市の宮南遺跡から出土した弥生土器（高杯）である。No.8，30は地元和泉的な胎土であるが、No.6，7の胎土は少し異なる。No.15の三軒屋遺跡から出土した弥生土器（壷）の胎土にはCa,Sr量が異常に多く、別の胎土である。縄文土器や弥生土器には時折、砂粒を多く含むものがあり、Ca,Sr量の異常性は胎土よりも、包含物に原因がある可能性もあるが、目下のところ、何ともいえない。

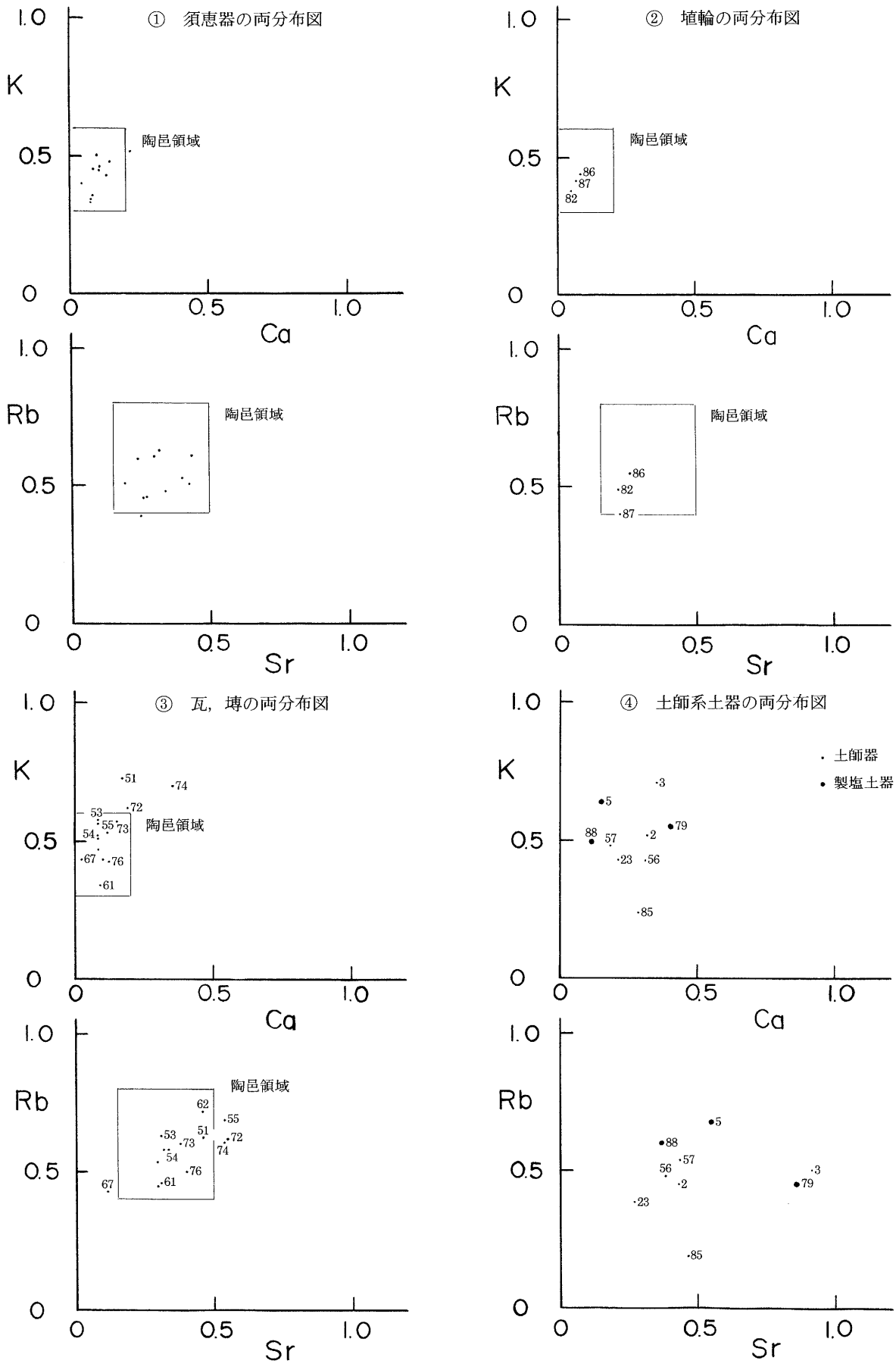
2点の粘土（No.69，70）は類似した化学特性をもっており、両分布図における分布位置からみて、地元、泉南的な特徴をもっていることがわかる。

第18図⑦には縄文土器の両分布図を示す。いずれも、Ca,Sr量が他の土器に比べて異常に多いことがわかる。さらに、分布図における分布にもまとまりを欠く。この原因も砂粒などの包含物による可能性が高い。この含有物は故意に添加したのか、それとも、砂粒を包含したままの、いわば、粗雑な粘土をそのまま土器の素材にしたのかはよくわからない。この点に、縄文土器の胎土研究の難しさがある。包含物の正体を明らかにするため、顕微鏡観察を行うのも一つの方法である。

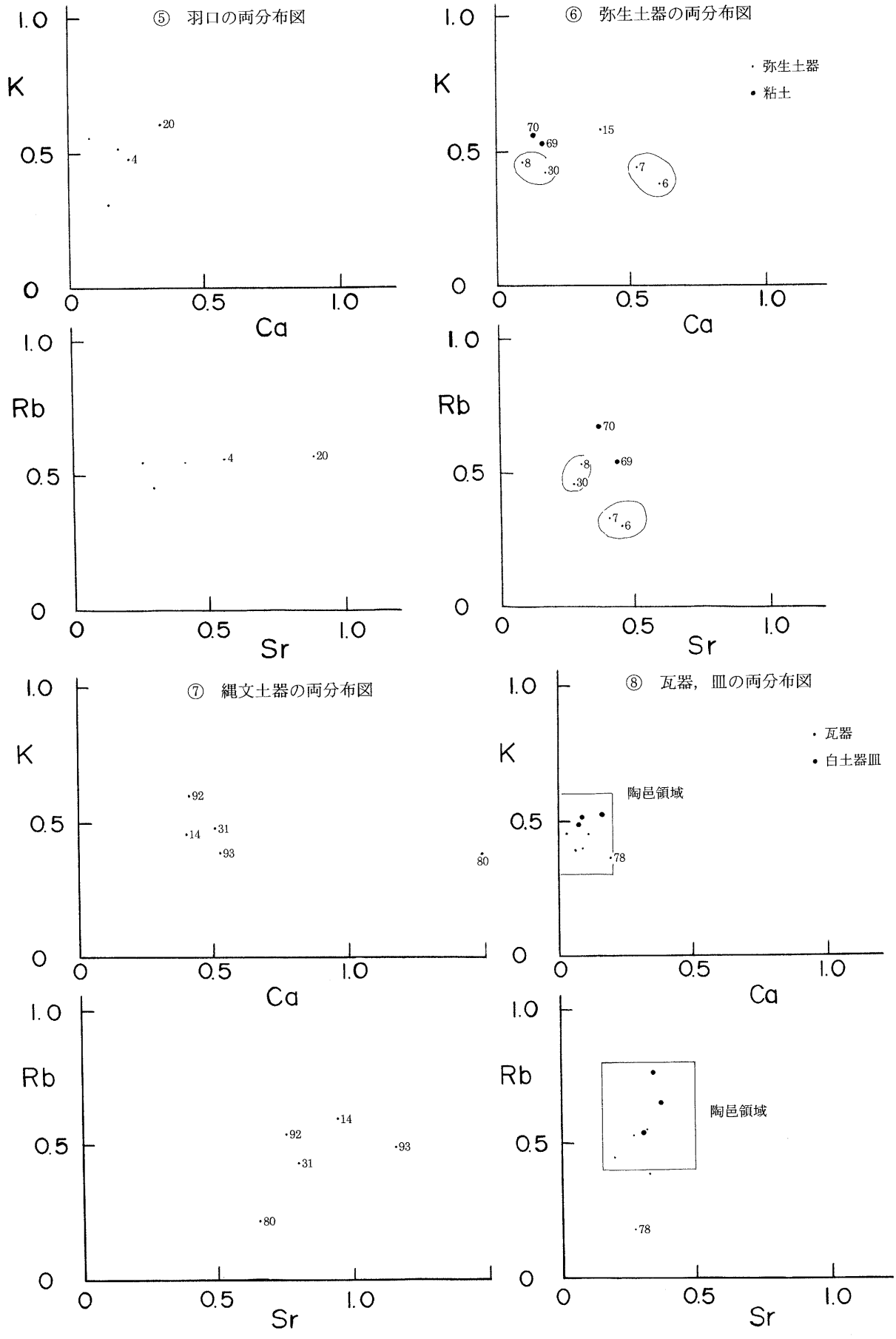
第18図⑧には中世の瓦器と白土器皿の両分布図を示す。No.78を除いて他の4点の瓦器胎土は類似している。和泉的胎土をもっており、地元産の瓦器とみられる。No.78は阪南市の箱作今池から出土した瓦器椀であり、Feによる吸収効果によって、微量元素Rb、Srの蛍光X線強度が減少したものとみられる。このようにFeの含有量が異常に多い胎土は微量元素については正確な分析値を示さないので注意を要する。

3点の白土器皿のうち、No.25，49にはFe含有量は少ない。それが土器が白い原因であろう。Fe含有量の少ない粘土を選択して皿を作ったものと推察される。K、Ca、Rb、Srの4因子からみる限り、泉南的胎土をもつと考えられる。

以上に、泉南地域のいくつかの遺跡から出土した、縄文土器から中世の瓦器胎土にいたるまで、ざっとみてきた訳であるが、その中に注目すべき点が一つある。須恵器、埴輪、瓦・塼、瓦器は比較的よくまとまって分布したのに対し、土師器、弥生土器、縄文土器は大きくばらついた点である。前者は主として硬質土器であるのに対し、後者は軟質土器である点が注目される。高温で焼成する土器の素材粘土は厳しく選択されたのではなかろうか、これに対して、比較的低温で焼成する土器の素材粘土は砂などの粗粒が混ざっていてもよく、甘く選択された粘土でも十分、軟質土器は焼成できたのではなかろうかという感じを受ける。これが事実であるとすると、元素分析による軟質土器の産地問題の研究は難しいことが予想される。今後の課題である。



第17図　胎土分析結果両分布図　①～④



第18図　胎土分析結果両分布図　⑤～⑧

付章Ⅱ　男里遺跡他出土土器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

泉南市に所在する男里遺跡では、縄文土器をはじめとして弥生土器、土師器、須恵器、大蛸壺や瓦漏などが出土している。これらは同一の場所から出土したとはいえ、それぞれの時代や用途によって異なる生産・流通事情を有していると考えられる。本報告では、各種土器の胎土の特徴を捉え、その違いや類似性を見出すことにより、上述した男里遺跡における土器の生産・流通事情の違いを考える。また、本報告では同じ泉南市に所在する氏の松遺跡や幡代遺跡および戎畑遺跡から出土した土器も比較対照試料として分析する。なお、本報告では各試料の生産地を直接推定することはできないが、今後に分析成果が蓄積された場合に有効に活用できる資料となり得るものである。

1．試料（第3表）

試料は、男里遺跡から出土した縄文土器3点、弥生土器6点、土師器1点、須恵器2点、大蛸壺、瓦漏各1点ずつの計14点と氏の松遺跡出土の弥生土器4点と幡代遺跡出土の瓦漏1点および戎畑遺跡出土の大蛸壺1点の合計20点である。各試料には1～4、7～21、39の試料名が付けられている。各試料の試料名、注記、器形などは分析結果を示した第3表に併記する。

第3表　蛍光X線分析結果

試料名	分析結果						試料記載		
	Fe(%)	Ca(%)	Na(%)	K(%)	Rb(ppm)	Sr(ppm)	ラベル名	記名	器形等
1	3.32	0.11	0.28	1.21	77	36	氏の松遺跡　弥生壺SK02出土	UJ93　246	弥生壺口縁部？
2	3.85	0.12	0.27	1.28	97	40	氏の松遺跡　弥生甕SK02出土	UJ93　226	
3	4.45	0.34	0.33	1.26	88	47	氏の松遺跡　弥生甕突帯付のカメ	UJ93　142	
4	3.70	0.30	0.34	1.39	94	50	氏の松遺跡　Sk01出土弥生　壺		弥生壺胴
5	3.12	0.89	1.23	1.61	74	190	男里遺跡　縄文	ON85　029	縄文？
6	4.50	1.02	0.84	0.85	49	122	男里遺跡　ON85	ON85　030	縄文？
7	9.48	3.48	0.45	0.57	11	136	男里遺跡	ON85　030	縄文？
8	3.61	0.40	0.58	1.29	85	88	男里遺跡	ON95（双子池）090	大蛸壺把手
9	4.48	0.30	0.65	1.69	112	70	男里遺跡	ON95（双子池）152	須恵器杯口縁部
10	3.73	0.33	1.10	2.49	117	92	男里遺跡	ON97　017	瓦漏底部
11	3.80	0.18	0.22	1.14	56	44	男里遺跡	男里　298	弥生土器体部
12	3.64	0.33	0.53	1.46	68	71	男里遺跡	男里　661	紀州弥生？体部
13	3.66	0.31	0.39	1.34	86	72	男里遺跡	男里　657	瓦漏体部
14	3.10	0.36	0.72	1.86	97	85	男里遺跡	男里　306	弥生土器体部
15	5.08	0.22	0.36	1.80	85	59	男里遺跡	男里　657	弥生土器体部
16	3.58	0.22	0.55	1.39	65	72	男里遺跡	男里　657	紀州？弥生高杯脚部
17	6.43	0.20	0.56	1.09	60	53	男里遺跡	ON-92-025	須恵器杯　体部
18	2.59	0.14	0.39	1.83	109	58	幡代遺跡	HT94（MHO）-001	瓦漏　口縁部
19	2.98	0.18	0.38	1.46	95	51	戎畑遺跡	EB95（JA）-1154	大蛸壺体部
20	2.64	0.40	0.50	2.22	96	86	男里遺跡		土師口縁部片

2．分析方法

蛍光X線分析による胎土の化学組成、特にFe・Ca・K・Rb・Srの含有量を明らかとし、これをもってK－Ca、Rb－Srの分布図を作成した。以下に装置、試料調整、測定条件を示す。なお、標準試料については、地質調査所発行のJG－1（崗閃緑岩）は現在入手不可能であることから、同じ群馬県沢入産のJG－1a（花崗閃緑岩）を使用した。

（1）装置

理学電機工業社製波長分散型蛍光X線分析装置（RIX1000）

（2）試料調製

土器試料を超硬カッターで切断、表面研磨した後、純水で洗浄した。110℃の恒温乾燥機で試料を乾燥させた後、振動ルミ（平工製作所製TI100：10ml容タングステンカーバイト容器）で微粉砕し、プリケット試料を以下の条件で作成した。

加圧装置：電動式試料成型機（理学電機工業社製9302－D3）

成形リング：塩化ビニル（30㎜ϕ）

加圧力：10ton（100kN）

（3）測定条件

X線管：Cr（50Kv－50mA）

分光結晶：LiF,TAP,Ge

検出器：F-PC,SC

3．分析結果（第19図）

分析結果を第3表、K－Ca分布図を図1、Rb－Sr分布図を図2に示した。KとRb、CaとSrはどちらも地球科学的には類似した挙動を示し、高い正の相関関係が認められている。したがって、K－Ca分布図において各試料の分離が良好であることが認められる。

両分布図で特に他の試料と異なる組成であるのは7～9の3点の男里遺跡出土の縄文土器である。また、これらの中でも7はNa・Kが比較的高く、9ではFe・Caが比較的高い傾向が認められる。一方、縄文土器以外の土器では、男里遺跡以外の遺跡出土試料も含めて胎土の傾向が類似しており、K－Ca分布図、Rb－Sr分布図ともにほぼ同じ分布域にプロットされる。ただし、11と19の男里遺跡出土の須恵器に関しては、他と比較してFeの含有量がやや高い。また、男里遺跡出土の瓦漏の12と幡代遺跡出土の瓦漏の20については、どちらもRbの含有量が高めの傾向にある。さらに、弥生土器の中でも、氏の松遺跡の試料は男里遺跡の試料に比べてSrの量が少ない傾向が読み取れ、男里遺跡の弥生土器の中でも紀州？とされたものは他の弥生土器に比べてSr多くRbが少ない傾向がある。なお、男里遺跡出土弥生土器の中でも13は他の試料よりRbもSrも少ない。大蛸壺については、男里遺跡出土の試料は、同遺跡出土の弥生土器と近い組成であり、戎畑遺跡出土の試料は氏の松遺跡出土の弥生土器に近い組成である。

4．考察

土器胎土の科学組成（特に蛍光X線分析による）から産地を推定しようとする試みは、須恵器における窯跡試料と遺跡出土試料との比較から始められ、これまでに大きな成果があげられている（三辻,1980：1983：三辻ほか,1984など）。しかし、土師器や弥生土器および縄文土器など窯跡の不明な土器については、データのばらつきや比較対照となる粘土や砂の資料がないことなどから産地が推定された例はない。それでも最近では、産地推定には至らないまでも地域的な胎土の違いを見出し、そこから土器の生産と流通を議論しようという試みもある。例えば中園・三辻（1998）では、九州地域における弥生土器の胎土の巨視的な地域性（薩摩西部・薩摩東部・豊後・九州北部など）と微視的な地域性（九州北部地域内の出土遺跡間）の違いを蛍光X線分析によるK・Caの分布から見出している。

今回の分析も産地推定に至るものではないが、分析結果の項で述べたような試料間の胎土の違いを検出した。その中でも縄文土器胎土の組成は他の試料に比べて著しく異なる。これは、土器片を観察して明らかなように含まれる砂（細礫含む）の状況が他の弥生土器などとは全く異なっていることから、当然の結果といえる。また、縄文土器3点の間でも含まれる砂の状況は異なっており、これも縄文土器3点間での胎土の大きな違いとなっている。これらについては、土器片の薄片を作製して偏光顕微鏡観察をすることにより、含まれている砂の岩石種や鉱物種を同定することができれば、胎土の由来する地域の地質学的な情報を得ることができる。それにより、土器の製作地域について、より具体的な議論が可能になると考えられる。

弥生土器については、今回の分析でも上述した微視的な胎土の違いは見出せる。すなわち図2における氏の松遺跡の弥生土器と男里遺跡の弥生土器との違いである。これは両遺跡間では弥生土器の製作・流通事情に共通する点があまりなかったことを示唆していると見て良い。また、男里遺跡内でも15、16、17のグループと13の単独グループおよび13の単独グループおよび14、18の紀州？とされたグループに分かれる可能性がある。特に第1番目のグループは、同じ男里遺跡出土の大蛸壺や土師器も入ることから、男里遺跡出土土器の胎土の中でも主流となる（すなわち在地性が高い）可能性がある。さらに弥生土器についても、肉眼では縄文土器ほど砂粒は目立たないが、今後類似の試料で胎土薄片の偏光顕微鏡下での観察を行うことができれば、胎土中に含まれる岩石片の種類や鉱物片の種類を知ることができる。これにより胎土の由来する地域も考えられる。

今後も蛍光X線の分析例を蓄積することと、これに薄片観察を加えることで、胎土を構成する砂や粘土の採取地域をある程度具体的に推定することが可能となり、土器の製作・流通に関わる事情をより詳細に明らかにできることが期待される。なお、縄文土器については、今回の結果にみられたように化学組成のばらつきが非常に大きいことがことが今後も予想されることから、薄片観察と胎土中の砂分の重鉱物組成による特徴把握が有効であると考えられる。

〈引用文献〉
三辻利一「胎土分析による土器の産地推定：蛍光X線法」『考古学・美術史の自然科学的研究』p.405.417　日本学術振興会　1980
三辻利一『考古学ライブラリー14　古代土器の産地推定法』p.80　ニューサイエンス社　1983
三辻利一・山本成顕・佐々木哲也「胎土分析による産地推定の実例」『古文化財の自然科学的研究』p.360-368　同朋舎出版　1984
中園　聡・三辻利一「九州弥生土器の胎土分析」『日本文化財科学会第15回大会研究発表要旨集』p.158-159　日本文化財科学会　1998

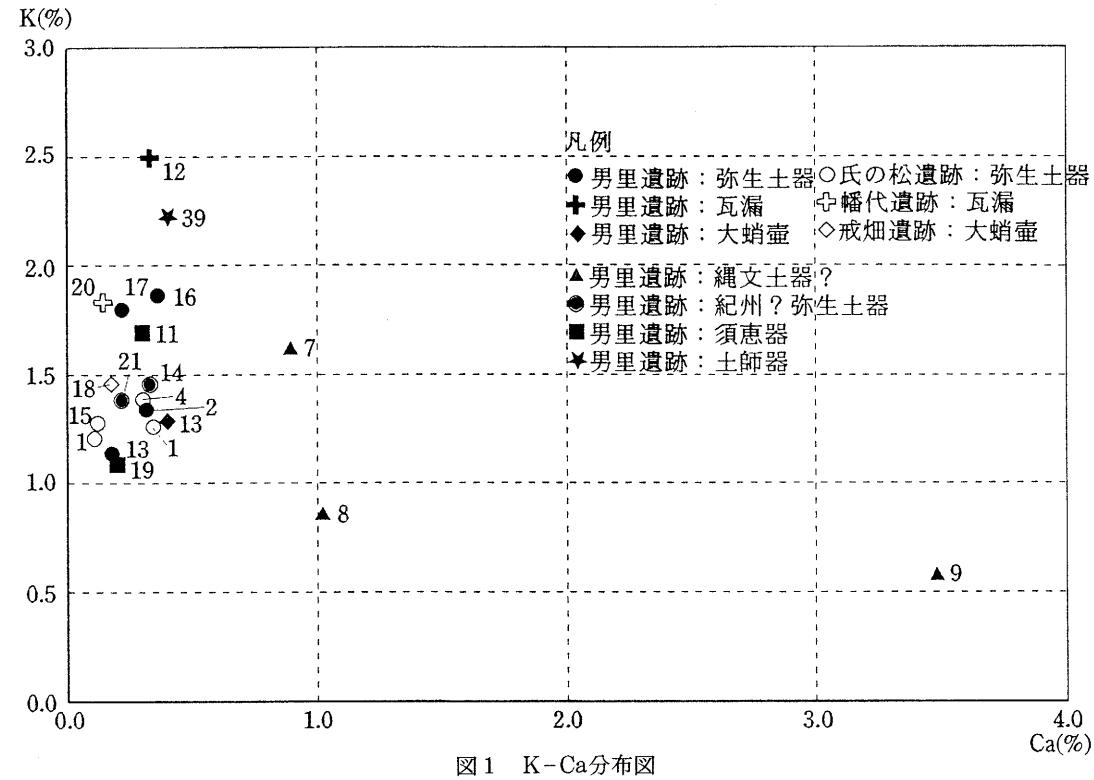


図1　K－Ca分布図

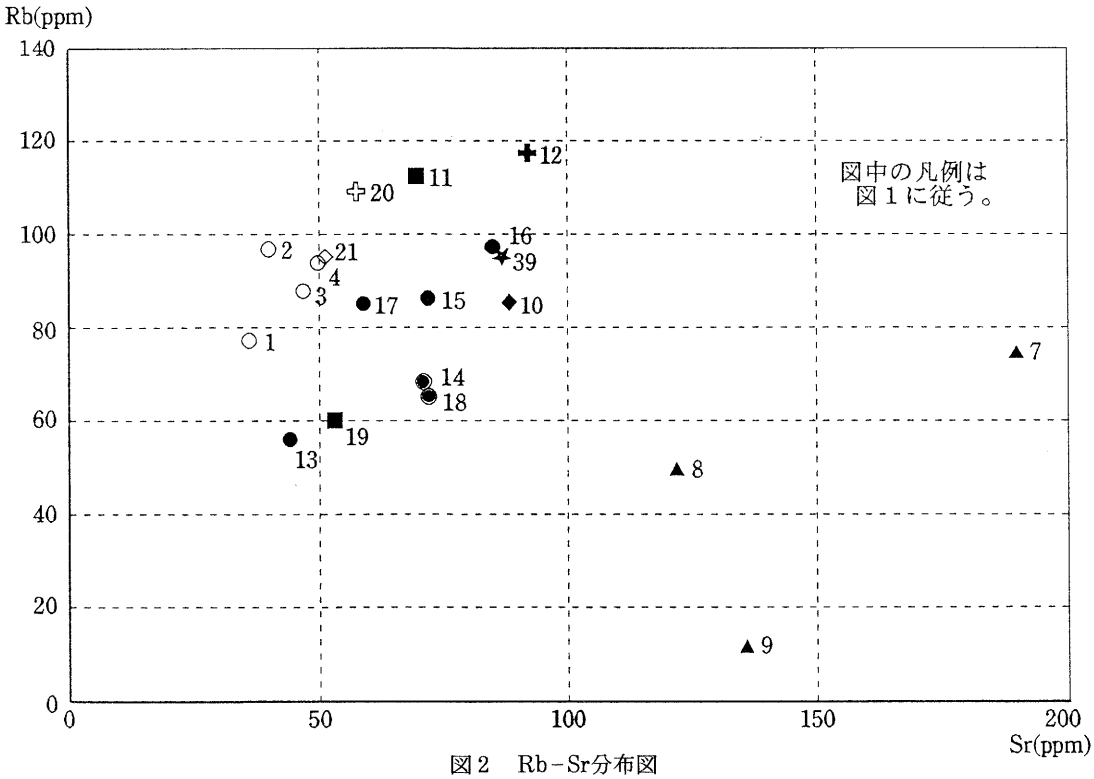


図2　Rb－Sr分布図

第19図　K－Ca分布図およびRb－Sr分布図

第４表　文化財一覧表

1	正法寺跡	51	屯田遺跡	101	禅興寺跡	151	昭和池遺跡	201	和泉鳥取遺跡
2	小垣内遺跡	52	八王子遺跡	102	ダイジョウ寺跡	152	上村遺跡	201	雨山遺跡
3	大谷池遺跡	53	慈眼院金堂･多宝塔	103	上之郷遺跡	153	狐池遺跡	203	内畑遺跡
4	大久保Ｂ遺跡	54	日根神社遺跡	104	向井代遺跡	154	上野中道遺跡	204	皿田池古墳
5	下高田遺跡	55	西ノ上遺跡	105	意賀美神社本殿	155	宮遺跡	205	正方寺遺跡
6	紺屋遺跡	56	川原遺跡	106	向井池遺跡	156	宮南遺跡	206	西畑遺跡
7	口無池遺跡	57	母山遺跡	107	三軒屋遺跡	157	芋掘遺跡	207	自然田遺跡
8	東円寺跡	58	母山近世墓地	108	川原遺跡	158	石ケ原遺跡	208	玉田山遺跡
9	降井家屋敷跡	59	向井山遺跡	109	岡田東遺跡	159	高倉山南遺跡	209	玉田山古墳群
10	大久保Ｃ遺跡	60	鏡塚古墳	110	岡田遺跡	160	本田池遺跡	210	玉田山須恵器窯跡
11	中家住宅	61	梨谷遺跡	111	氏の松遺跡	161	上代石塚遺跡	211	寺田山遺跡
12	大久保Ａ遺跡	62	笹ノ山遺跡	112	座頭池遺跡	162	信之池遺跡	212	黒田西遺跡
13	五門北古墳	63	土丸遺跡	113	岡田西遺跡	163	滑瀬遺跡	213	鳥取北遺跡
14	五門遺跡	64	土丸南遺跡	114	新伝寺遺跡	164	六尾遺跡	214	鳥取遺跡
15	五門古墳	65	雨山城跡	115	中小路北遺跡	165	六尾南遺跡	215	鳥取南遺跡
16	大浦中世墓地	66	土丸城跡	116	中小路西遺跡	166	専徳寺遺跡	216	黒田南遺跡
17	大浦遺跡	67	下大木遺跡	117	中小路遺跡	167	天神ノ森遺跡	217	神光寺(蓮池)遺跡
18	甲田家住宅	68	大木遺跡	118	坊主池遺跡	168	キレト遺跡	218	三味谷遺跡
19	久保Ｂ遺跡	69	稲倉池北方遺跡	119	中小路南遺跡	169	高田遺跡	219	三升五合山遺跡
20	鳥羽殿城跡	70	大西遺跡	120	北野遺跡	170	男里北遺跡	220	小口谷遺跡
21	墓の谷遺跡	71	松原遺跡	121	一岡神社遺跡	171	戎畑遺跡	221	井関遺跡
22	来迎寺本堂	72	中開遺跡	122	海会寺跡	172	男里遺跡	222	石田山遺跡
23	池ノ谷遺跡	73	末廣遺跡	123	海会寺瓦窯	173	光平寺跡	223	西鳥取遺跡
24	成合寺遺跡	74	安松遺跡	124	大苗代遺跡	174	光平寺石造五輪塔	224	戎遺跡
25	山ノ下城跡	75	長滝遺跡	125	仏性寺跡	175	樽井南遺跡	225	貝掛遺跡
26	山出遺跡	76	植田池遺跡	126	海営宮池遺跡	176	男里東遺跡	226	金剛寺遺跡
27	上瓦屋遺跡	77	郷ノ芝遺跡	127	市場遺跡	177	長山遺跡	227	塚谷古墳群
28	湊遺跡	78	日根野遺跡	128	向井山遺跡	178	山ノ宮遺跡		
29	壇波羅密寺跡	79	机場遺跡	129	新家遺跡	179	前田池遺跡		
30	壇波羅遺跡	80	棚原遺跡	130	下村遺跡	180	幡代遺跡		
31	佐野王子跡	81	羽倉崎東遺跡	131	下村北遺跡	181	幡代南遺跡		
32	上町東遺跡	82	羽倉崎遺跡	132	下村１号墳	182	奥ノ池遺跡		
33	市場東遺跡	83	嘉祥神社本殿	133	新家オドリ山東遺跡	183	林昌寺跡		
34	若宮遺跡	84	道ノ池遺跡	134	新家オドリ山遺跡	184	林昌寺瓦窯跡		
35	上町遺跡	85	羽倉崎上町遺跡	135	下村２号墳	185	林昌寺銅鐸出土地		
36	俵屋遺跡	86	船岡山遺跡	136	新家古墳群	186	岡中遺跡		
37	北尻遺跡	87	岡本廃寺	137	新家オドリ山南遺跡	187	高田山古墳群		
38	岡口遺跡	88	田尻遺跡	138	フキアゲ山西遺跡	188	岡中西遺跡		
39	中嶋遺跡	89	船岡山南遺跡	139	引谷池窯跡	189	雨山南遺跡		
40	小塚遺跡	90	夫婦池遺跡	140	兎田遺跡	190	福島遺跡		
41	十二谷遺跡	91	樫井西遺跡	141	フキアゲ山東遺跡	191	尾崎海岸遺跡		
42	丁田遺跡	92	藤波遺跡	142	フキアゲ山１号墳	192	馬川北遺跡		
43	新池尻遺跡	93	樫井城跡	143	フキアゲ山２号墳	193	馬川遺跡		
44	大坪遺跡	94	奥家住宅	144	兎田古墳群	194	下出北遺跡		
45	市堂遺跡	95	道ノ池遺跡	145	池尻遺跡	195	室堂遺跡		
46	北ノ前遺跡	96	岡ノ崎遺跡	146	中の川遺跡	196	平野寺(長楽寺)跡		
47	野々宮遺跡	97	中菖蒲遺跡	147	岩の前遺跡	197	向出遺跡		
48	総福寺天満宮本殿	98	岸ノ下遺跡	148	別所北遺跡	198	高田西遺跡		
49	宮ノ前遺跡	99	諸目遺跡	149	別所遺跡	199	向山遺跡		
50	垣外遺跡	100	城ノ塚古墳	150	高野遺跡	200	高田南遺跡		

報 告 書 抄 録

ふりがな	おのさといせきはっくつちょうさがいよう・Ⅳ
書名	男里遺跡発掘調査概要・Ⅳ
副書名	府営地域総合オアシス整備事業（泉南地区・双子池改修工事）に伴う
巻次	－
シリーズ名	－
シリーズ番号	－
編著者名	芝野圭之助・城野博文
編集機関	大阪府教育委員会　文化財保護課
所在地	〒540-0008　大阪府大阪市中央区大手前２丁目　Tel.06(6941)0351
発行年月日	西暦１９９９年　３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
おのさと 男里遺跡	おおさかふせんなんし 大阪府泉南市 おのさとじない 男里地内	27228	ＯＮ	34度 21分 30秒	135度 15分 40秒	1998年11月１日 ～ 1999年１月20日	300	溜池堤体 改修工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
男里遺跡	集落	・弥生時代中期 ・弥生時代後期～ 古墳時代初頭	流路	弥生土器 土師器 製塩土器	・弥生時代中期の流路が検出され、従来想定されていた遺構の拡がりに新知見が得られるとともに、古環境復元のための新たなデータを獲得することが出来た。

図　　版

ＰＬ．１　泉南地域の文化財

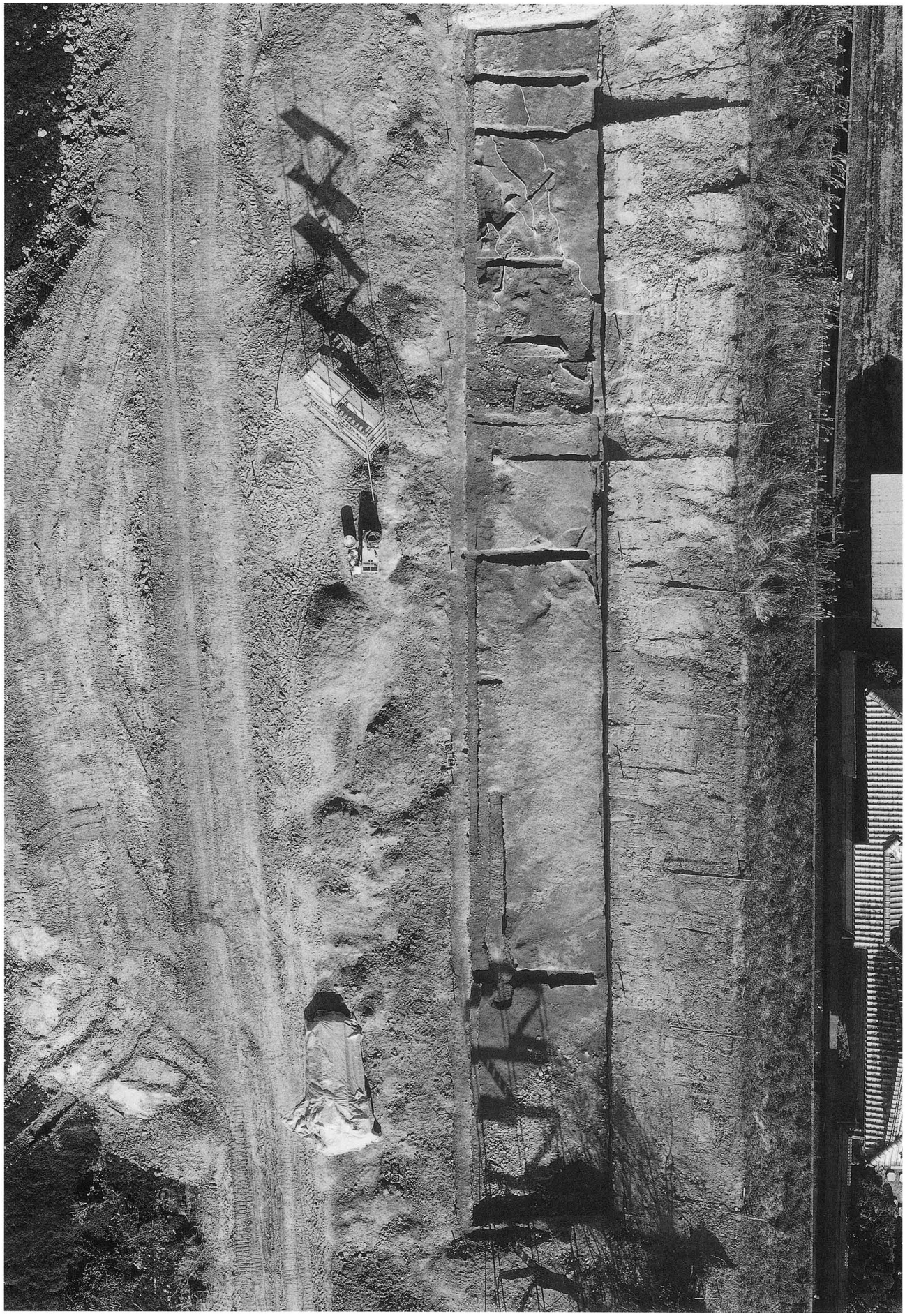
ＰＬ．２　泉南地域の地形分類図

ＰＬ．３　調査区遠景

南東から

東から

ＰＬ．４　調査区全景①



垂直（上が北）

北西から

南西から

北から

北西から

南西から

北西から

流路断面
（北東から）

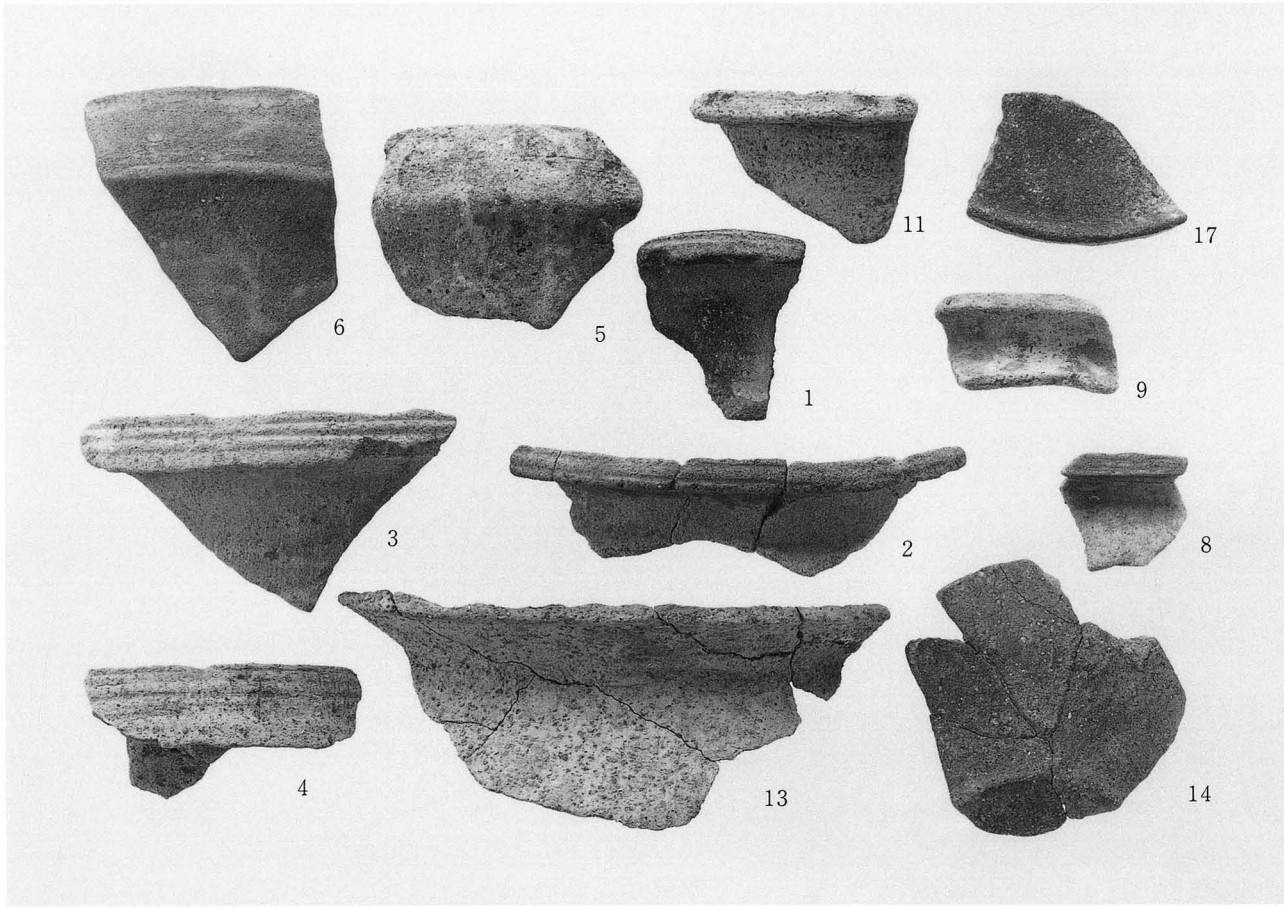
南西から

同（北東から）

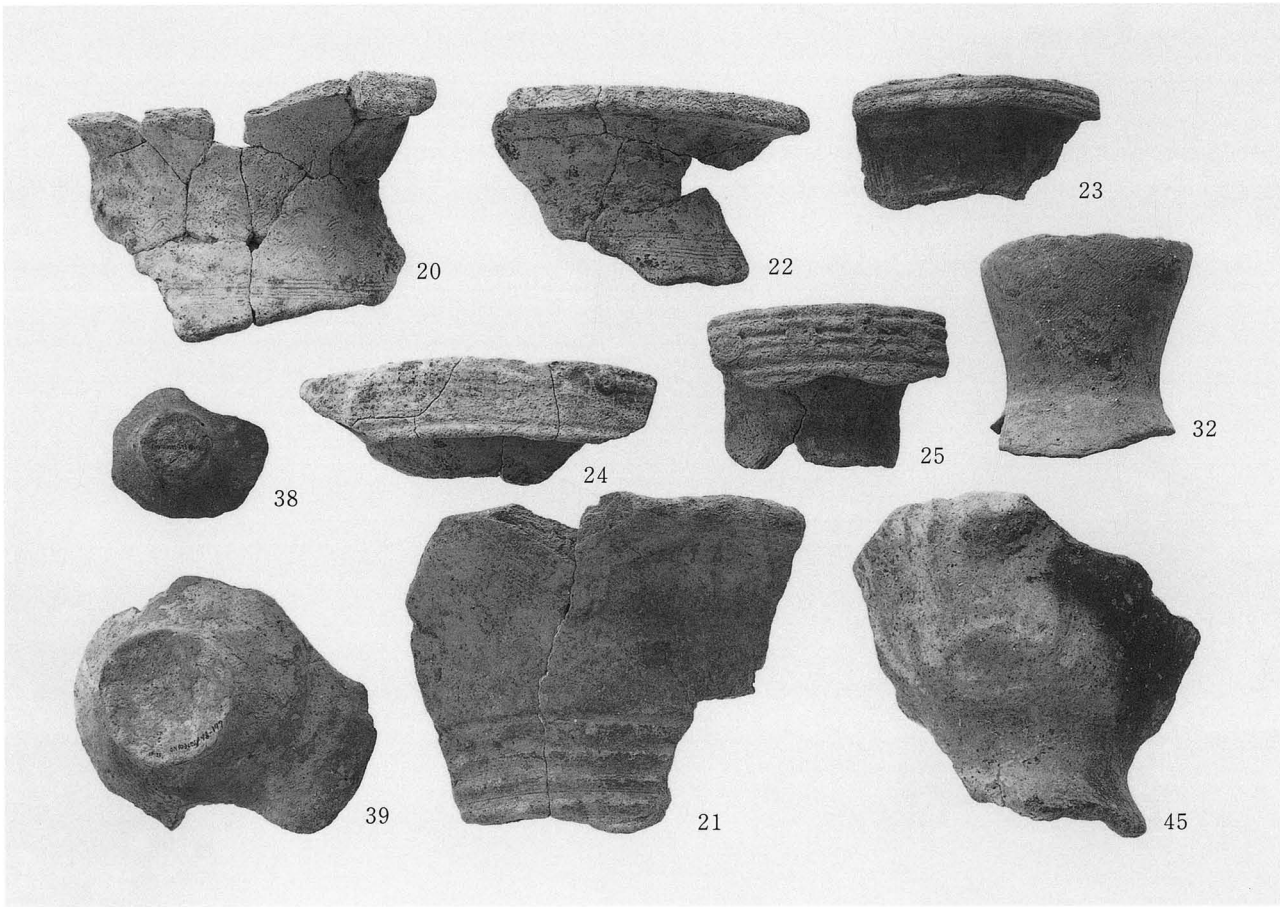
遺物出土状況（西から）

同詳細（南東から）

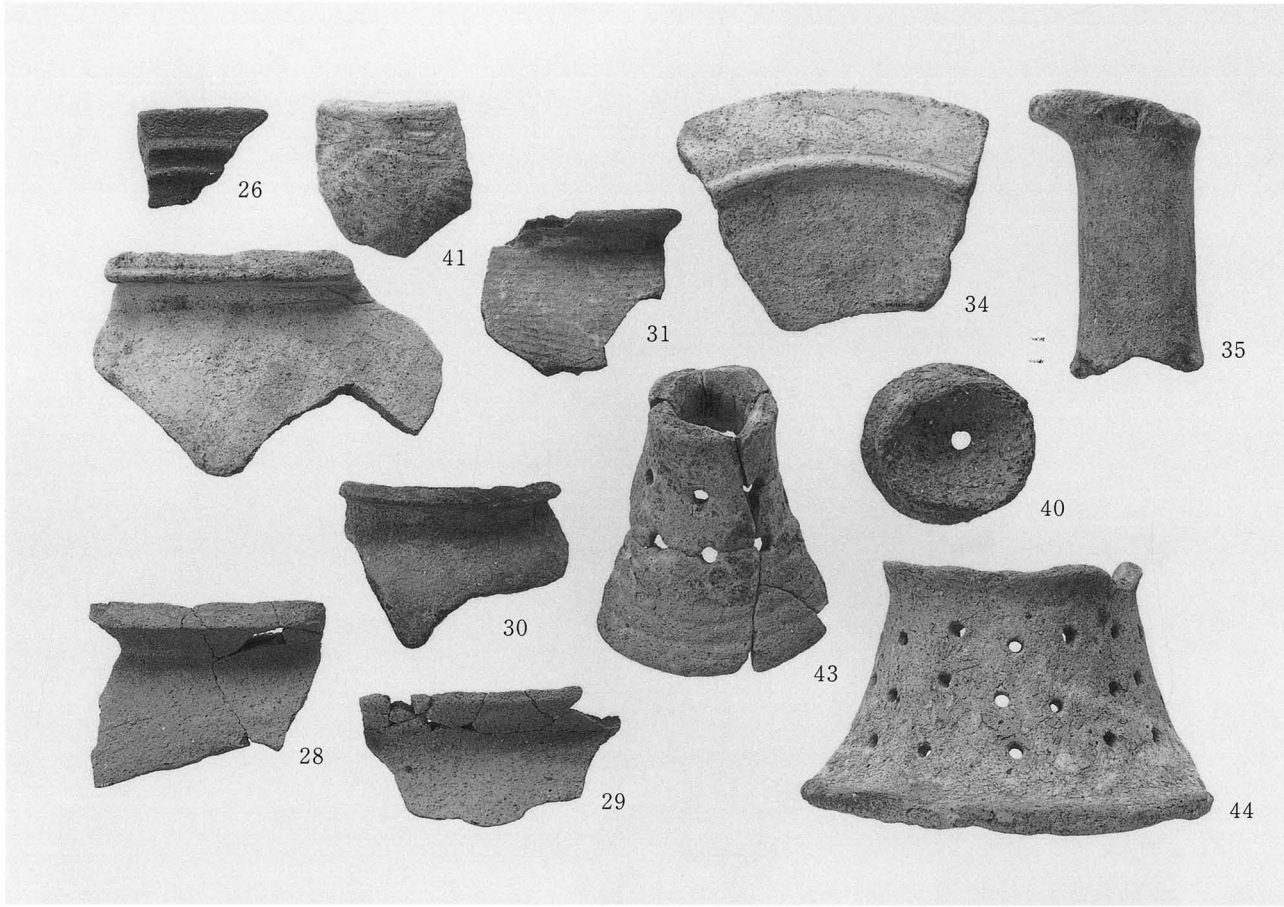
同詳細（西から）



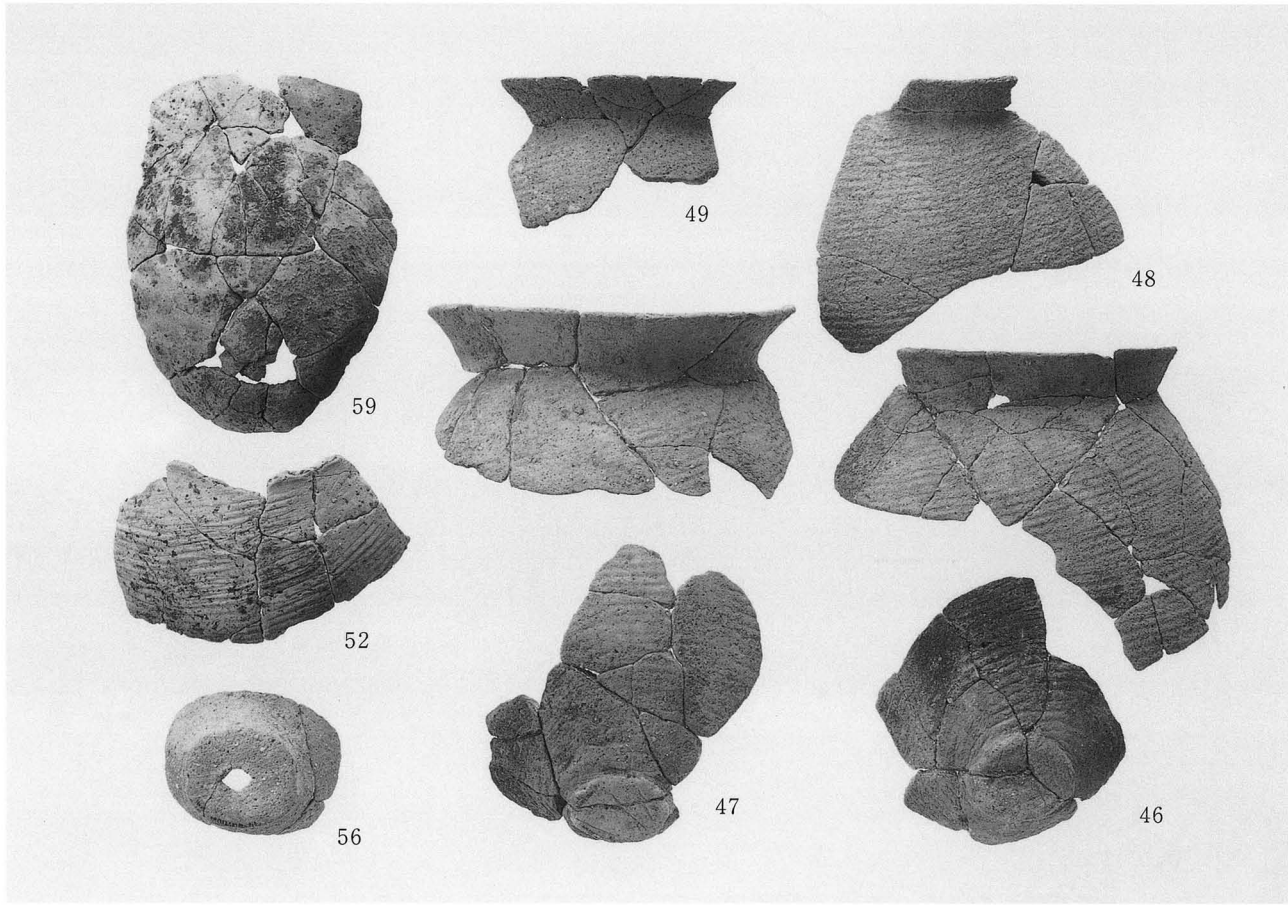
流路１出土遺物



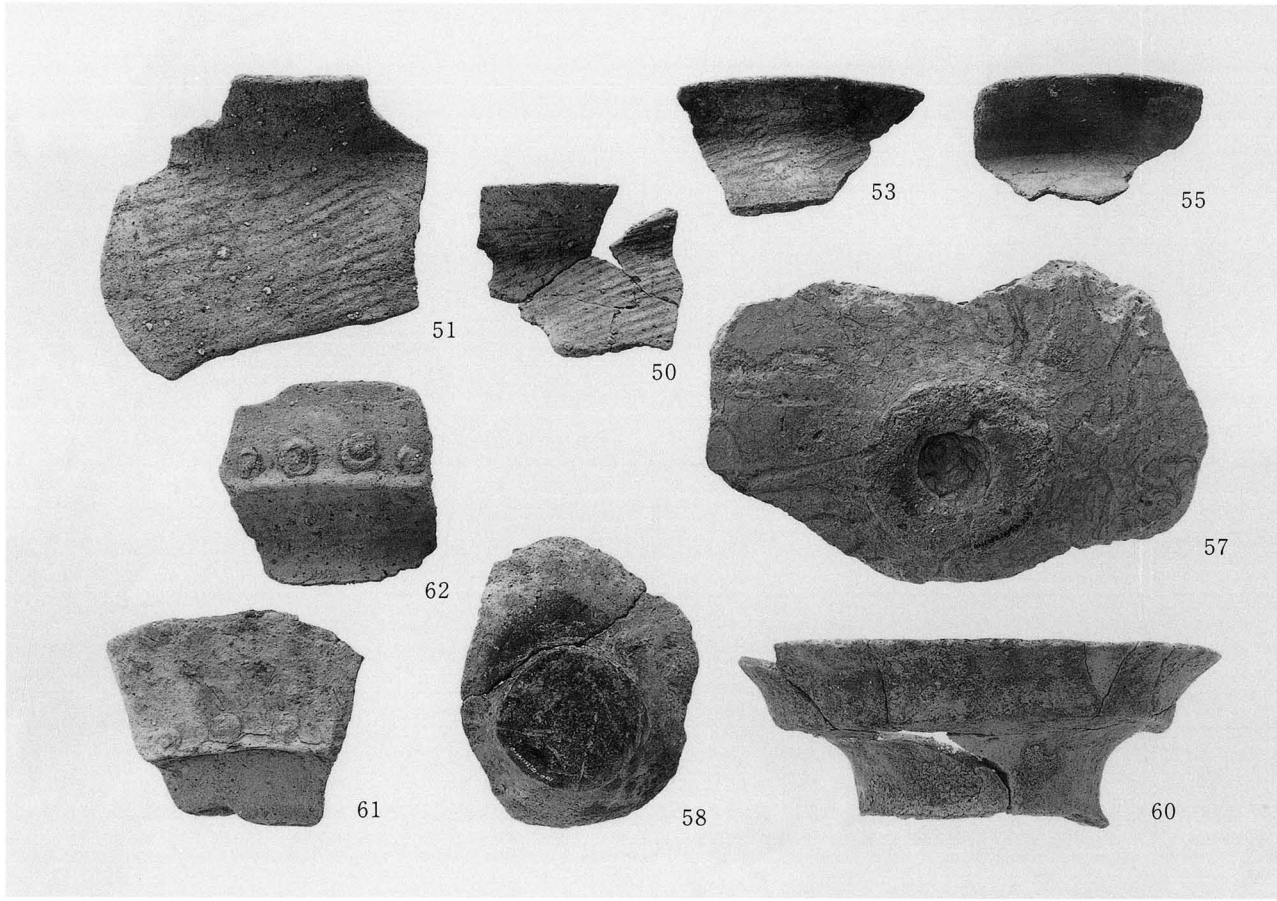
流路２出土遺物①



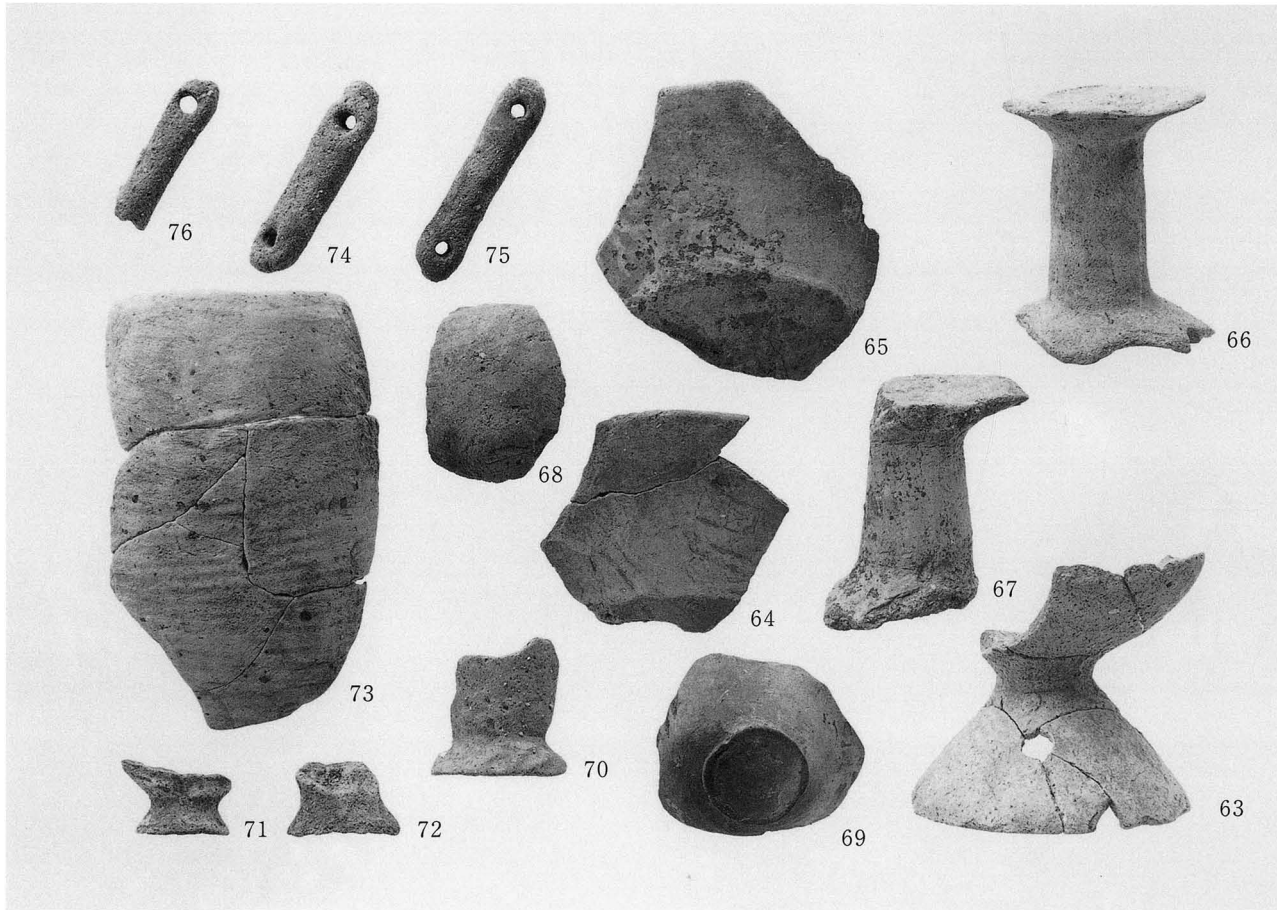
流路 2 出土遺物②



流路 3 出土遺物①



流路３出土遺物②



流路３出土遺物③